

昭和五十七年度 陵墓関係調査概要

監査
実施報告書

調査の全容

昭和五十七年度には、古代の高塚式陵墓と、埋蔵文化財包蔵地内にある陵墓について、營繕土木工事実施のため、施工区域の遺構・遺物の有無確認の事前調査と立会調査を、次のように行った。また台風による土砂崩壊の災害が発生したので、災害区域に露出した遺構の緊急現状調査と、復旧工事施工時の立会調査とを次のように実施して、遺構と遺物の破壊防止に万全を期した。

〔事前調査〕

一、恵我漢伏岡陵（大阪府羽曳野市誉田六丁目）周堀内外法整備工事区域の調査（古市陵墓監区、八／九月実施）
担当 笠野毅・福尾正彦・中谷一信・塩野孝臣・古沢寿一・西野正治・浅野良文・堀内朝保・木林成嘉

〔立会調査〕

二、河野宮墓（奈良県吉野郡川上村大字神之谷字中坂 金剛寺内）参道石垣・同門柱改修工事箇所の調査（畝傍、七月実施）
担当 平木雄喜也

三、北白河陵（京都市左京区北白川追分町）陵前及び参道両側外構柵設置工事箇所の調査（月輪、八月実施）
担当 茶谷尚三・辻井忠則

陵 墓 調 査 室

三、香隆寺陵（京都市北区平野八丁柳町）排水管整備工事箇所の調査（月輪陵墓監区、五月実施）

担当 藤井良章・山田昭彦

四、深草北陵（京都市伏見区深草坊町）排水設備改良工事箇所の調査（桃山、五月実施）

担当 笠野毅・森本安雄・舟瀬利昭・高田慶昭

七、成菩提院陵（京都市伏見区竹田淨菩提院町）鳥居建替工事箇所の調査（桃山、九月実施）

担当 舟瀬利昭

担当 森本正哲

八、坂合黒彦皇子墓（奈良県吉野郡大淀町大字今木）鳥居建替工事箇所の調査（畠傍、八月実施）

担当 小畠実

九、泉山陵墓地（京都市東山区今熊野泉山町）北部境界擁壁設置・補償工事箇所の調査（月輪、八月実施）

担当 鎌田恒雄・椋本武・北野聖史

一〇、菩提樹院陵（京都市左京区吉田神楽岡町）鳥居建替工事箇所の調査（月輪、九月実施）

担当 茶谷尚三・清水孝平・辻井忠則

一一、仲津山陵（大阪府藤井寺市沢田四丁目）鳥居建替工事箇所の調査（古市、九月実施）

担当 以倉喜久男・中谷一信・山本良文

一二、埴生岡上墓（大阪府羽曳野市はびきの三丁目）鳥居建替工事箇所の調査（古市、九月実施）

担当 浅野良文

一三、檜隈大内陵（奈良県高市郡明日香村大字野口）鳥居建替工事箇所の調査（古市、十月実施）

担当 古澤寿一

一四、百舌鳥耳原中陵（大阪府堺市大仙町）陵前中堤電柱建設工事箇所の調査（古市、十月実施）

担当 久保俊郎

一五、後嵯峨天皇以下三方火葬塚（京都市右京区嵯峨亀ノ尾町）外構柵改修工事箇所の調査（桃山、十一～一月実施）

担当 古沢寿一

担当 小畠実

一六、月輪陵（京都市東山区今熊野泉山町泉涌寺内）北側築地堀改修・同堀雨落溝設置工事箇所の調査（月輪、十一～三月実施）

担当 鎌田恒雄・椋本武・北野聖史

一七、恵我藻伏岡陵整備工事箇所の調査（古市、十一～二月実施）

担当 塩野孝臣・浅野良文・富賀武・中谷一信・堀内朝保・富賀稔

一八、畠傍山南纖沙渓上陵（奈良県橿原市西池尻町）整備工事箇所の調査（畠傍、一～三月実施）

担当 中野雅之・中村直嗣

一九、百舌鳥耳原中陵第三堀余水吐補修工事箇所の調査（古市、二月実施）

担当 古澤寿一

二〇、恵我藻伏岡陵陵前古市陵墓監区事務所水道管改修工事箇所の調査（古市、三月実施）

担当 堀内朝保・大平齐

二一、百舌鳥耳原中陵背面第三堀汚泥浚渫工事箇所の調査（古市、三月実施）

担当 古澤寿一

二二、百舌鳥耳原中陵背面第三堀汚泥浚渫工事箇所の調査（古市、三月実施）

担当 古澤寿一

施）

担当 中辻武

〔緊急現状調査〕

云、那羅山墓（奈良市法蓮町）墳丘北側裾崩壊復旧工事箇所の調査（畠傍、十一月実施）

三、佐保山南陵（奈良市法蓮町）崩壊部露出石組実測調査（畠傍陵墓監

区、八月実施）

担当 松岡和男・池谷浩行

〔復旧工事立会調査〕

三、玉手丘上陵（奈良県御所市大字玉手）見張所裏崩壊復旧工事箇所の

調査（畠傍陵墓監区、十月実施）

担当 前川勲

四、抜上博多山上陵（奈良県御所市大字三室）巡回路崩壊復旧工事箇所

の調査（畠傍、十月実施）

担当 久保俊郎

五、檜隈大内陵西側巡回路石垣崩壊復旧工事箇所の調査（畠傍、十月実

施）

担当 久保俊郎

六、奈保山東陵（奈良市奈良阪町）墳丘崩壊復旧工事箇所の調査（畠傍、

十一・十二月実施）

担当 上田良範

七、菅原伏見西陵（奈良市宝来町）墳丘裾崩壊復旧工事箇所の調査（畠

傍、十一月実施）

担当 西田哲也

以上の調査のうち事前調査は、当調査室員と所管陵墓監区の調査担当職員とで調査を行い、立会調査・緊急現状調査・災害復旧立会調査は、当調査室の指示のもとに、所管陵墓監区の調査担当職員が調査に当り、状況に応じて当調査室員も調査を行った。工事は調査結果に基づいて、

当庁京都事務所工務課が、遺構遺物の保存を配慮して施工した。調査による出土遺物については、檜崎彰一・名古屋大学教授、林屋晴三・東京国立博物館主任研究官・矢部良明・同館陶磁室長に一部鑑定を依頼した。

一の恵我藻伏岡陵の調査は、陵前（陵北側）及び陵西側の内堀の外法面の発掘調査で、調査により工事予定区域の大半は、攪乱層、崩落堆積層、盛土層であることが判明した。又数箇所で礫群を検出したが、これ等礫群が、原初の葺石・崩落堆積礫・盛土中の群礫の何れかは、本発掘範囲の所見では判定出来なかつた。本調査には、地質・地層について、梅田甲子郎奈良教育大学教授に鑑定を依頼し、検出された礫群の処置と

工法については、末永雅雄・坂本太郎・有光教一・斎藤忠・三木文雄・

坪井清足の各陵墓管理委員と、安江朝光建設省土木研究所急傾斜地崩壊研究室長に、現地見分と京都事務所の工事設計案の検討を依頼し、会議検討の結果、検出された礫群と、工事掘削により出現した遺構・礫群等は保存することとし、遺構・礫群等の存在区間はこれらを保存出来るよう設計変更を行うことに方針を決定した。本調査の採集遺物は、埴輪円筒二八五四片、形象埴輪四八片、土師器一〇三片、古瓦一〇四片、須恵器二片、陶磁器四五片、鉄製品一点、計三一五七片である。

二の香隆寺陵は陵域四隅と参道入口の調査で、一箇所の地山層のほかは、盛土層を認めたのみである。

三の堀河天皇火葬塚は陵域西南隅の調査で、盛土層を認めたのみである。

四の深草北陵は陵前見張所から参道入口までの間の調査で、先年の調査の際に出土遺物があつたので、調査室員を派遣して行い、土師器三〇片、須恵器一片、陶磁器二片、古瓦二片、鉄器一片、計三六片の遺物を採集した。

五の河野宮墓と六の北白河陵は、在来の石積撤去部分の調査のため、遺構・遺物は検出されなかつた。

七の成善提院陵の調査は、鳥居基礎壙の攪乱層から古瓦一四片、埴輪片、陶磁器五片、計二〇片の遺物を採集し、古瓦には窯元名の刻印がある宇瓦がある。

八の坂合黒彦皇子墓は、鳥居基礎壙で三層の埋土と一層の地山層を認めたのみである。

九の泉山陵墓地では、岩磐とその上の崩落堆積層を認めた。

二の仲津山陵では、鳥居基礎壙底部に地山の礫層を認めたが、大阪層群か否かは不明。

三の仲生岡上墓では、鳥居基礎壙で地山上に三層の盛土層を認めた。

三の檜隈大内陵では、鳥居の位置は表土下が元來地山であることが判明した。

四の百舌鳥耳原中陵では、この部分が盛土であることを認めた。

五の後嵯峨天皇以下三方火葬塚では、古瓦一四片、埴輪一片、計一五片

の遺物を掘削により採集し、古瓦三片を表面採集した。

二六の月輪陵では、陵北側地域が盛土されていることが判明した。

二七の恵我藻伏岡陵では、陵前区域で事前調査により検出された数箇所

- 印石組露出地点

の礫群は、何箇所かでその存在区域が拡大しただけで、新しい礫群や遺構は検出されなかつた。陵西側の掘削区域は、北端を除く殆ど全域に、掘削底面で粗砂細礫層が露出した。梅田教授の検分によると、この層は



第1図 佐保山東陵石組の露出位置 (1/1500)・露出状況

大阪層群である。大阪層群の露出上端には起伏があり、この層上には中央部附近で洪積層の粘土層が載り、部分的には一メートル近く立ち上る所もある。また南部では一部に埴輪片を含む冲積層が大阪層群に載る区域もある。これらの地層上には全域で崩落堆積層が載つており、現状は宮建当初より可成り変形していることが判明した。本調査の出土遺物は埴輪円筒一〇八四片、形象埴輪四片、土師器五片、須恵器一片、古瓦一片、陶磁器七片、計一一二片である。

六の畠傍山南纖沙溪上陵は、墳丘外周の柵設置、溜池内法面護岸等の掘削箇所調査であるが、遺構・遺物は検出されなかつた。

元の百舌鳥耳原中陵は構造物の、三の恵我藻伏岡陵は事務所建設時の盛土の掘削に留り、三の百舌鳥耳原中陵も遺物はない。

三の佐保山南陵の調査は、台風の降雨で土砂崩落により石組が露出したので、その実測を行つた。露出地点は、陵域内眉間寺跡背後の、墳丘の載る高さ七メートル余の台地急傾斜地の上部で（第一図）、台地平坦部上面下七〇センチ～一三七センチの範囲である。用石は幅三〇～六〇センチ、厚さ一〇～二〇センチの川石で、四段積み四個が露出する。ボーリング探索では西方に延びる。これが墳丘の施設か、眉間寺に関するものかは不明。三の復旧工事で土留柵を設けて埋戻し石組の保存を行つた。その折崩落土砂中から石組用石と思われる川石二個と、近世の瓦五片が出土した。

三の元の調査は、地山露出部と崩落土の調査で、遺構・遺物は検出さ

れず、三の檜隈大内陵崩落部の大半は、拝所構築後の盛土であることが判明した。

三の佐保山東陵では、崩落土の調査で、土師器一三〇片、瓦質土器七片、陶器三片、火葬骨一片、計一四一片を採集した。土師器片は接合するものが可成りあって、中には梵字・名号等の墨書の残る物や、微細な骨片が附着する物があるので、これは中世の庶民の藏骨器と思われる。

三の越智岡上墓・三の越智岡上陵とも崩落部に遺構は認められず、遺物もない。

以下一及び二の恵我藻伏岡陵、四の深草北陵、七の成菩提院陵、五の後嵯峨天皇以下三方火葬塚、三の佐保山東陵の各調査について、調査の詳細を掲載し、末尾に前回掲載出来なかつた昭和五十六年度調査七の大聖寺宮墓地、同八の伏見宮墓地について調査の詳細を附載する。

（石田茂輔）

恵我藻伏岡陵整備工事箇所の調査

応神天皇恵我藻伏岡陵は、東が高く、西が低い段差のある地に築造された、ほぼ北面する前方後円墳である。墳丘裾をめぐる周濠の外にも、部分的に濠が認められ、周辺の発掘調査によつても、本来は二重濠であったことが確認されている。陵前および西側面の境界沿いは、水路が走り、農業用水や隣接する住宅などからの雑排水により、経年にわたり、

内堤外法裾が侵食され、法面が緩やかに滑落している。そこで、これらの部分に擁壁・外構柵取設その他の工事を行なうことになり、昭和五十七年八月二十三日から九月十五日まで、事前発掘調査を行なつた。この間、考古学・地質学および土木工学の専門家の現地検分を願い、それぞれの立場からの指導・助言を賜つた。また、昭和五十七年十二月十日から翌年二月十七日までの掘削時には、立会調査を実施した。事前調査を中心、両者の調査の結果の概要を述べることとする。

事前調査は、内堤外法面に計三十四本のトレンチを設けて発掘した。

内訳は、陵前東側一本、同西側十四本、西側面に九本である。トレンチは幅1~2メートル、長さ1~4メートルとした(第2図)。

調査地は、広大な範囲にわたるため、大きな地形の変化を伴うが、一応、次のように、標準的な層序を考えることができる。

I層 表土。黒色腐食土。

II層 二次的な池沼堆積土。内堤外法裾からの浚渫土(IIa)、余水吐からの流入堆積土(IIb)、および旧水路堆積土(IIc)、旧池沼堆積土(IId)と思われるものがある。

III層 二次的な遺構の埋土(IIIa)と堤の嵩上げをした盛土(IIIb)がある。

IV層 覆土。梅田甲子郎氏から崩落堆積土であるとの教示を得た。

礫の含有状態等により数層に分離できる。調査地全域にわたり認められる。

V層 客土または盛土。古い堤体(渡り土堤)を成すもの(Va)と、泥沼地を埋め立てた際に上位を被覆したと思われるもの(Vb)、およびVI層と共に、本来の堤体を構成するもの(Vc)がある。

VI層 地山。東側の1~10トレンチでは、粗砂層もしくは粘質砂層(VIa)、および砂礫層(VIb)、西側の12~34トレンチでは、粘土層(VIc)、砂礫層(VIe)、一部に有機物を含む自然堆積層(VIf)を認める。なお、31~32トレンチでは、Vle層の上位に灰黄色粘質土(VId)を観察できた。梅田氏から、Vle層は大阪層群、VIb層はその可能性が高い層、VId層は洪積層であるとの教示を受けた。

陵前東側各トレンチの状況

第1トレンチ(第3図1) 調査地の東端に設けた。前方部内堤の東隅にあたる。表土下には、径10センチ前後の礫を含んだ砂礫層(IV層)があり、下位に至るにつれ、礫の割合を減じる。IV層の最下層では、再び礫は多くなる。IV層下には、池沼堆積土(IIc層)と思われるものが認められる。本来の堤体と考えられるものは、検出されなかつた。IV層中より、楕形埴輪、字瓦などが出土した。

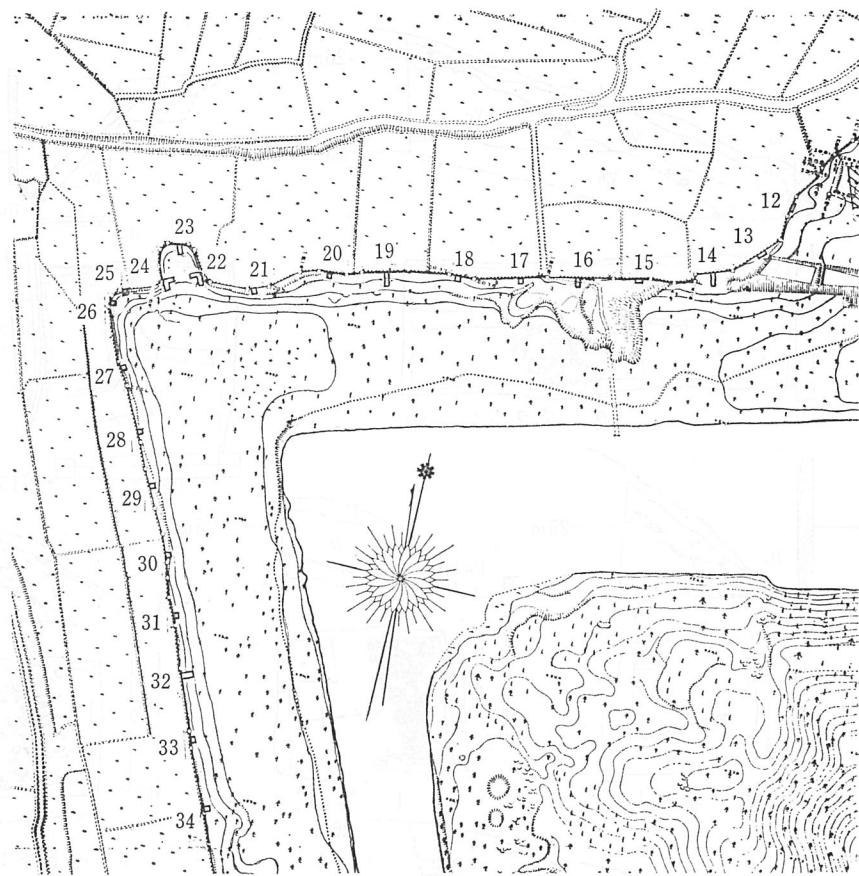
第2トレンチ(第3図2) 内堤東隅から西へ約23メートルのところにあたる。この部分は、上位を除き、本来の堤体の状態を比較的良く、とどめている。つまり、地山である灰黄色砂礫層(Vlb層)の内濠寄り



の上面を水平に整形した後、赤褐色砂礫層（Vc層）にて盛土した状態がうかがわれる。この層の上面の礫は、IV層中のものが露呈したものである。ただし、本来の葺石の裏込めとして利用された可能性も残されている。IV層中から埴輪、瓦などの破片が検出された。

第3・4トレンチ（第3図3・4） 第3トレンチは、東側内堤が、水路寄りにやや突出している箇所に設けた。第4トレンチは、東隅から約六三メートルのところにある。表土下に、黄色砂礫層・黃灰色粘質砂層（IV層）、黃灰色粗砂層（VIa層）がある。また裾寄りの部分には、水路からの浚渫土（IIa層）が認められる。4トレンチでは、IV下層において、一〇センチ前後の礫から成る礫群が検出されたが、3トレンチでは観察されない。地山（VIa層）は、4トレンチでは、水路に対して下向していくのに対し、3トレンチでは、水平に展開している。立会調査時にVIa層を掘り下げたところ、約三〇センチの厚さを有し、茶褐色砂礫層（VIb層）に統くことが明らかになった。樁形埴輪・鎧瓦などが、IV層から出土した。

第5・6トレンチ（第3図5・6） この部分の現堤体は、他に比して表面が削られ、高さを減じている。基本的には、第3・4トレンチと同一の層序を示す。5トレンチで検出された礫群は、やや多くの埴輪片を混じえている。6トレンチでは、



第2図 恵我藻伏岡陵調査箇所の位置 (1/2500)

の攪乱が著しい。内濠寄りで認められる落ち込みも、その一つである。本来の堤体を成したと思われる褐色粗砂層 (Vc 層) もかなり削られ、葺石をとどめていない。落ち込み上位の平坦な面で検出された礫群も、砂礫層中に含まれていたものであろう。地山は、上位に薄い褐色粗砂層 (VIa 層) があり、灰色砂礫層 (Vlb 層) へと続く。IV 層中から、埴輪・瓦などが出土しているが、量的には少ない。

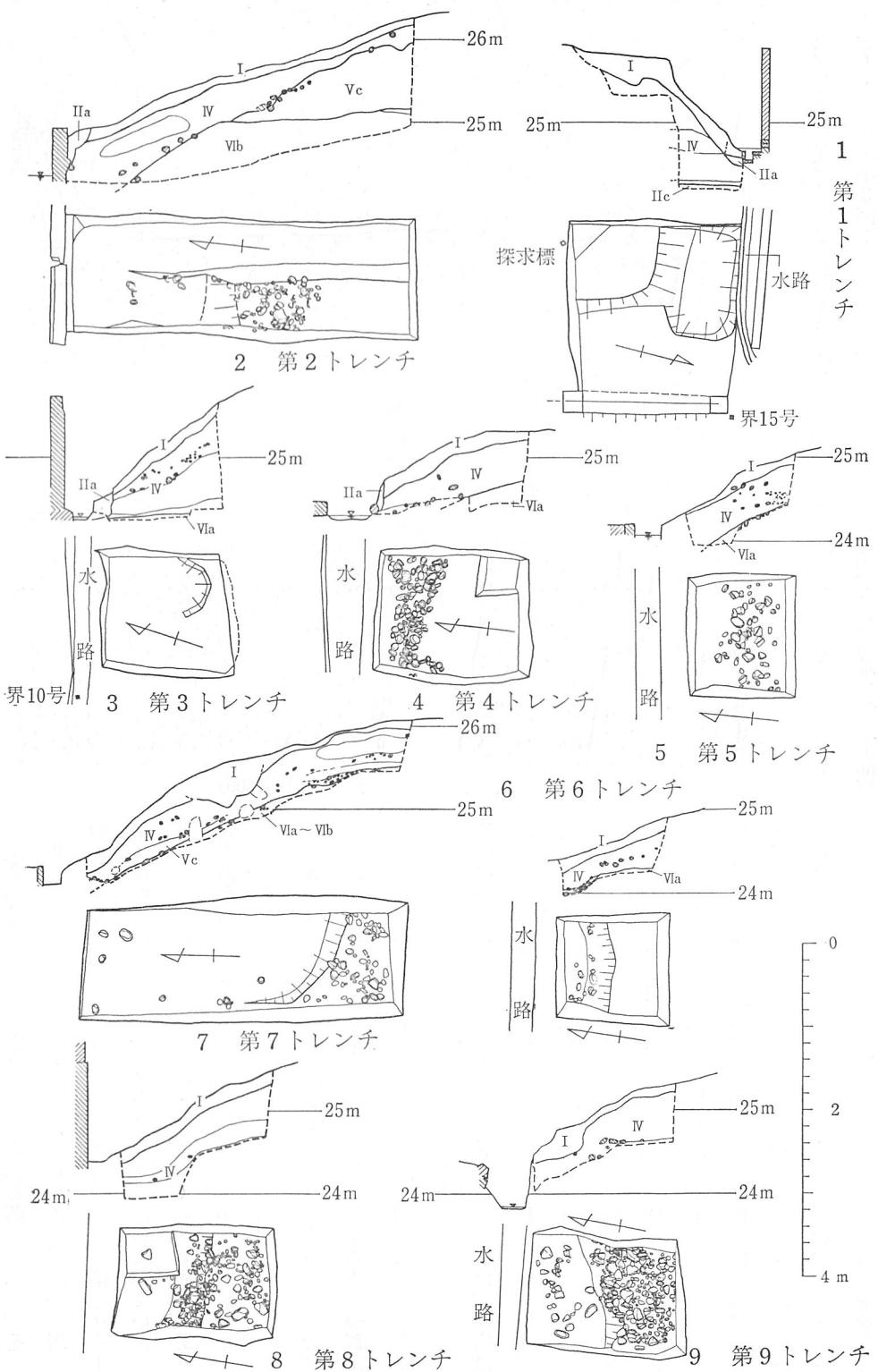
第8・9トレンチ（第3図8・9） 表土下の黄色砂礫層 (IV 層) の下位に、径五~一〇センチの礫から成る礫群が検出された。相互に有機的な関連は認められず、また、周囲の土も締りがない。出土地点のレベル差も数一〇センチある。立会調査時にさらに掘り下げたところ、8トレンチでは、IV層はさらによくことが確かめられた。IV層中から埴輪片などが出土した。

第10・11トレンチ（第4図10・11） 陵前東側約七〇メートルのところに、内堤と陪冢丸山古墳とを繋ぐ渡り土堤がある。

その内堤と外堤接合部の東側に設けたトレンチである。渡り土堤は、昭和四十七年度の盛土工事により西側に拡幅されて、現在、上部幅約三メートル、下部幅約七メートル、高さ約一・三メートルの断面台形を呈しているが、本来、上部幅約〇・七メートル、

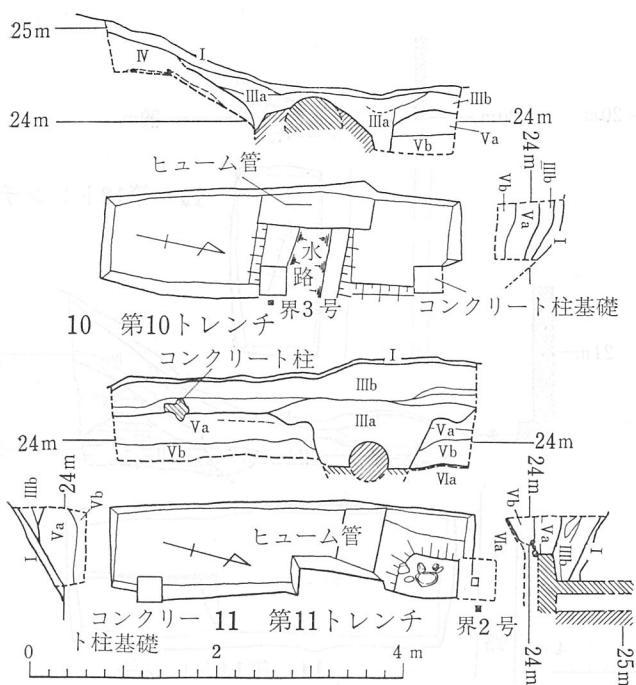
水路寄りに落ち込みがあるが、その落ち込み面に、礫が散在している。

第7トレンチ（第3図7） 陵前東側内堤のほぼ中央に設定した。後世



第3図 恵我藻伏岡陵トレンチ平面および断面(1) (1/80)

いた。今回の調査でも、これらを裏付けることができた。10トレンチは、昭和四十七年度に、樋管を改修した際に埋設したヒューム管の埋土（IIIa層）とそれに伴うと思われる盛土（IIIb層）が多くを占めている。灰色粘質土（Va層）は、上位が黒色を帶びており、昭和四十七年度当時の旧地表と考えられる。灰色粘質土（Vb層）は、付近の畑土と同質である。11トレンチでは、Vの層の中央北寄りに幅約一・五メートルの



第4図 恵我藻伏岡陵トレンチ平面および断面(2) (1/80)

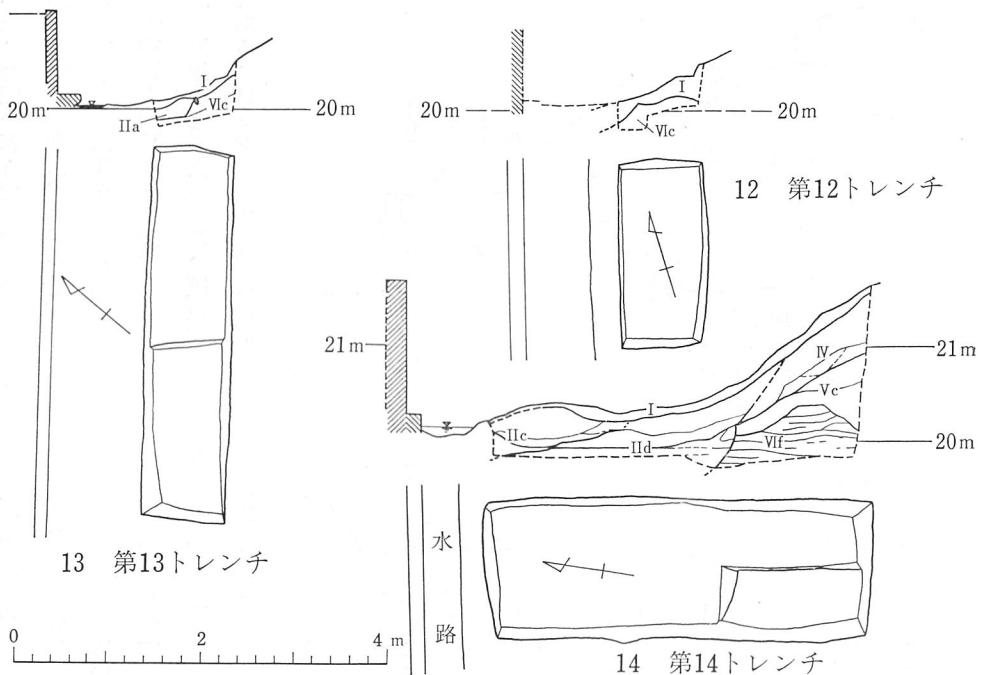
溝状遺構が認められるが、中央をヒューム管埋設により切断されており、その性格は不明である。また、Va層とVb層との間で認められた数個の石は、コンクリート柱の基礎の栗石であろう。10トレンチの内濠寄りのほうでは、IV層の下部で礫群に混じって、多くの埴輪片が出土した。11トレンチの出土遺物は極めて少ない。

以上の陵前東側1～11トレンチにおける所見をまとめると、次のようになる。

表土層の下には、厚さ数一〇センチの崩落堆積土（IV層）があり、埴輪片、瓦片、円礫などを含んでいる。その下に旧堤体があり、盛土層及び地山から成る。地山は、2トレンチで認められるが如く、本来は中途から水平に整形し、盛土し易いように工夫したのである。旧堤体の外法面は変異が著しく、葺石は既に失なわれていたと考えられる。葺石もしくはその裏込めかとも疑われる礫群をいくつか認めたが、これらは上下のレベル差も大きく、営建時の葺石と断定できるものではなかった。

陵前西側各トレンチの状況

第12・13トレンチ(第5図12・13) 陵域は拝所の前面で、三角形状に張り出している。その北西側の境界沿いに、12・13トレンチを設けた。前者は、内堤外法裾から約二三メートルのところに、後者は、陵域内にその痕跡をとどめている外濠が西側にのびる部分にほぼあたる。ともに表土下一〇～一〇センチで、粘質砂層に至る。おそらくVI層の一枚ではなかろうか。若干の埴輪片が出土している。



第5図 惠我藻伏岡陵トレンチ平面および断面(3) (1/80)

第14トレンチ（第5図14） 本トレンチは、内堤西隅から約一九五メートルのところに設定した。水路寄りの平坦面は、湿地状の地形をなしており、本来の外濠の一部にあたると考えられる。この部分の堤体は、

水底において自然堆積した層と考えられる、粘土層・有機質黒色土層および砂層から成る固く締った土相（VI_f層）と粘土層（V_c層）である。

VI_f層上面は、内濠方向への傾斜面をもつ。つまり、堤体とは逆の勾配面を有し、その上に盛土を行なっている。安定した盛土作業をするため

の配慮であろう。その後、この堤体の裾は大きく抉られ、有機質分を含むやや軟質の茶褐色土（II_d下層）が堆積している。内濠寄りの堤体は、

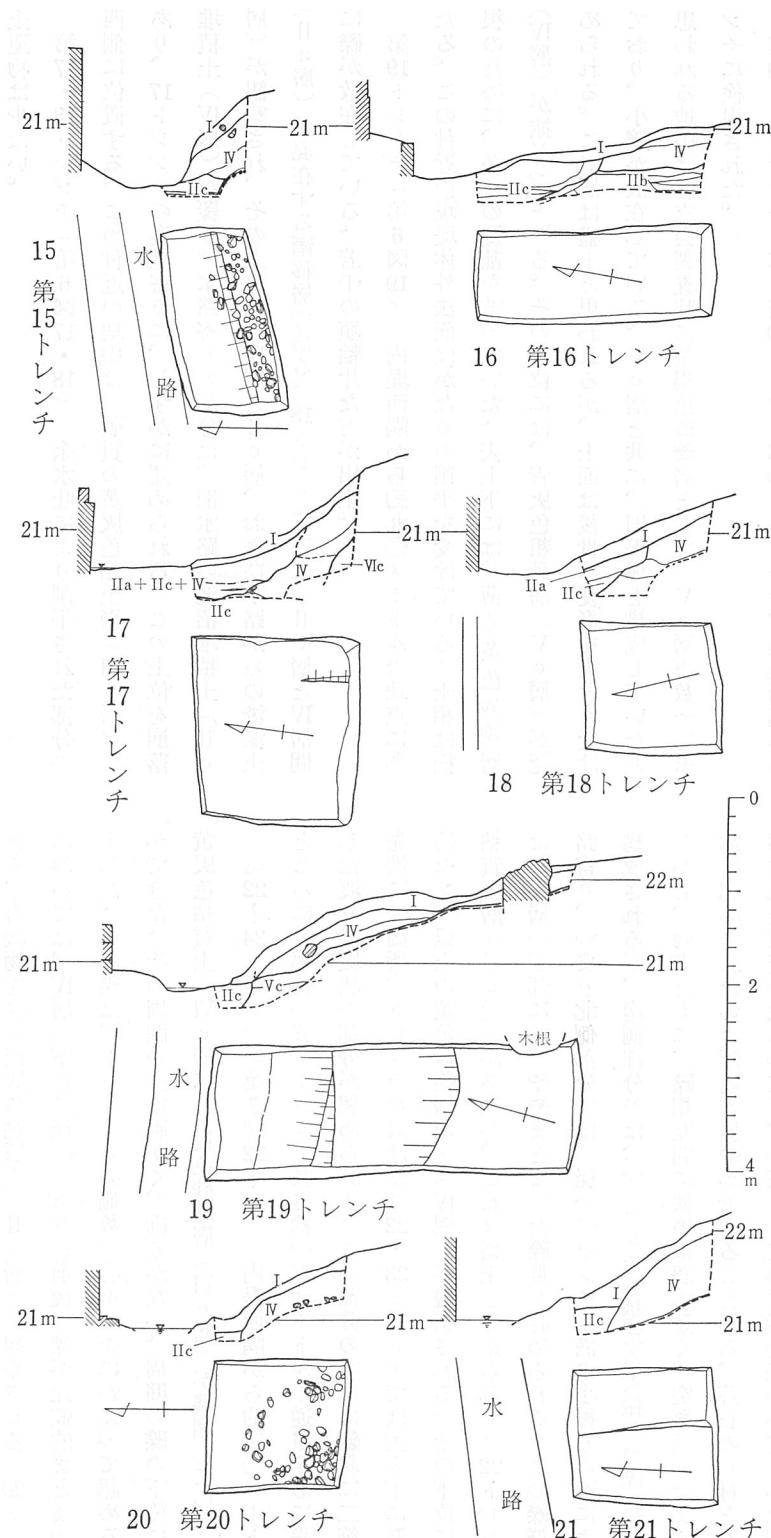
II_d下層の堆積後、再び大きくカットを受けている。崩落堆積土（IV層）が、調査地を覆った後に、再度、有機物を含んだ茶褐色粘質土（II_d上層）が堆積している。その後、該地は溝となり、数次にわたり、池沼堆積土で覆われ、その度に溝の幅を狭め、現在の水路と化したと思われる。IV層中などより、若干の埴輪片が出土した。

第15トレンチ（第6図15） 内堤西側のほぼ中央には、内濠からびる余水吐があり、これによって裾部は大きく削られている。この部分に四箇所のトレンチを設けた。本トレンチは、その東端に位置する。層序は、基本的には、14トレンチと同様である。つまり、礫群を上部にとどめる灰色粘質土（IV下層）の水路寄りの部分に旧水路と思われるII_c層が観察される。その上位を再度、黄色粘質土・黄灰色粘質土（IV上層）が覆っている。盛土層・地山は検出されていない。立会調査時に、この

礫群は、本トレンチの東方約一・四メートル、西方約一・八メートルにわたって拡がっているのが、確認されている。埴輪・瓦片などがIV層から出土した。

第16トレンチ（第6図16） 余水吐の流出口付近に設けた。内濠寄り

に、余水吐からの堆積土(IIb層)が、互層を成しているのが知られる。IIb層の下部には、泥炭層も認められる。IIb層は、上位を黃色砂礫層、および灰色粘土層から構成される崩落堆積土(IV層)にて覆われている。また、水路寄りには、旧水路の池沼堆積土(IIc層)が観察される。出



第6図 恵我藻伏岡陵トレンチ平面および断面(4) (1/80)

土遺物は少ない。

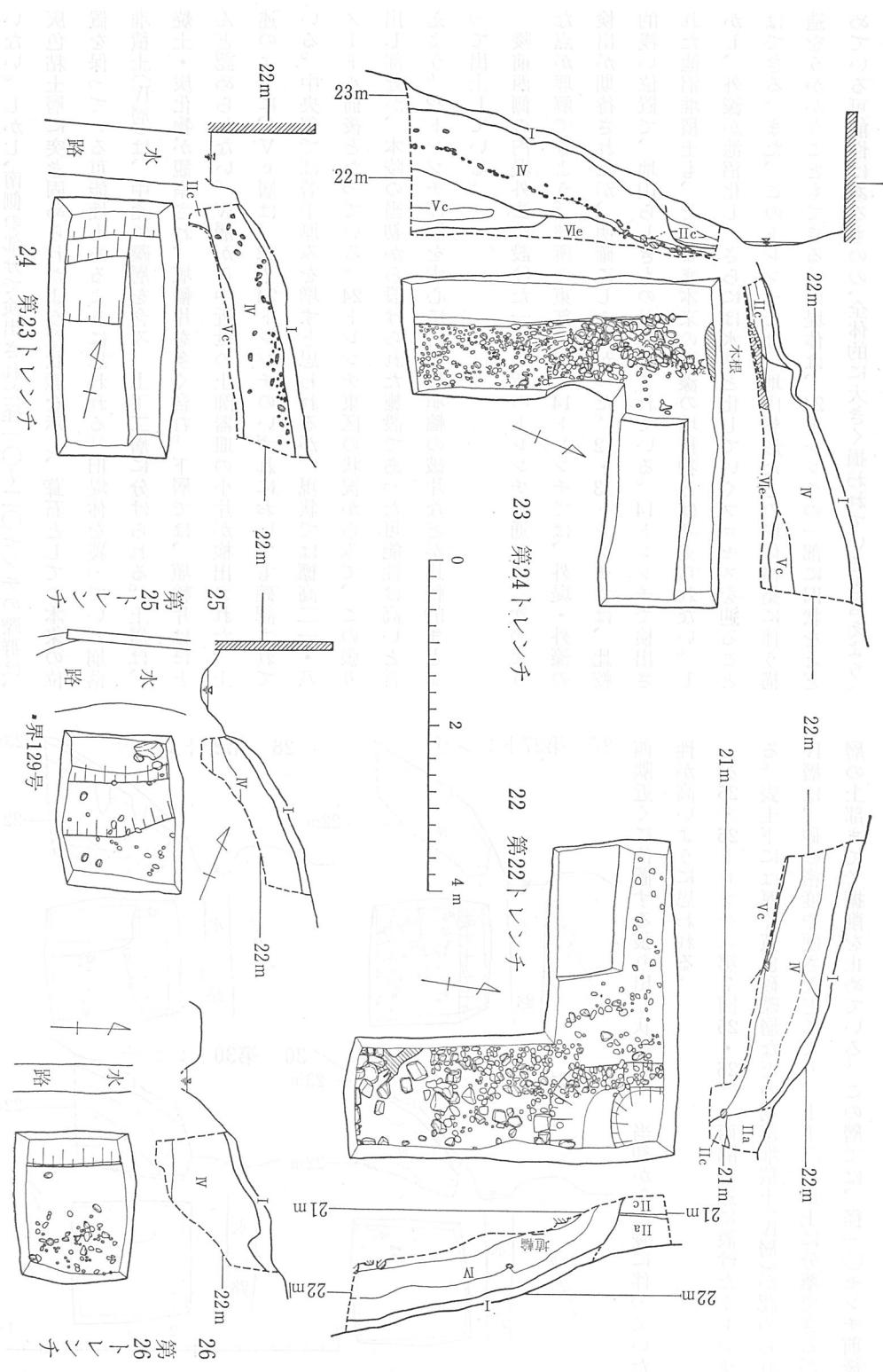
第17・18トレンチ（第6図17・18）余水吐により削平された部分の西側に位置する。この付近の地山は、硬質の黄灰色粘土層（VIc層）であり、17トレンチの奥壁寄りに、わずかに認められる。この上位を崩落堆積土（IV層）が覆う。水路寄りの部分は、旧水路の池沼堆積土（IIC層）が観察され、その上位は、IV層とIIc層、および水路からの浚渫土（IIa層）が混在する漸移層である。18トレンチでは、IIc層とIV層間に礫が散在している。若干の埴輪片などが出土。

第19トレンチ（第6図19）内堤西隅から約九〇メートルの地点にある。この付近の現堤体外法面はかなりの削平を受けている。土相は松根のために、多くの攪乱を被っていた。表上下には、薄く黄色砂礫層（IV層）が拡がっている。その下位には、青灰色粗砂層（Vc層）が認められる。この層は盛土と思われるが、上面は後世の変形を大きく受けしており、小礫が散在している。Vc層と共に、旧堤体を構成していたと思われる地山は、立会調査時に茶褐色砂礫層として、Vc層下数一〇センチに検出された。

第20・21トレンチ（第6図20・21）第20トレンチは、内堤西隅から約七五メートルのところに、第21トレンチは約五〇メートルのところに設けた。21トレンチを中心とした部分の内堤は削平され、瘦せていて、が注意される。土相は、両者ともに相似した状況を示す。つまり、表土下には、黄色砂礫層（IV層）が認められ、水路寄りの部分に、旧水路と思わ

れる、有機物を含んだ灰色粘質土（IIC層）が観察される。20トレンチにおいては、IV層の下部に径一〇センチ前後の礫が比較的まとまって出土した。この礫は、トレンチの両側数一〇センチにわたって認めることができた。その周囲の土は軟かく、締りがない。周囲の礫の下位には、黄灰色粘質土（VIc層）、茶褐色砂礫層（VIe層）が展開している。

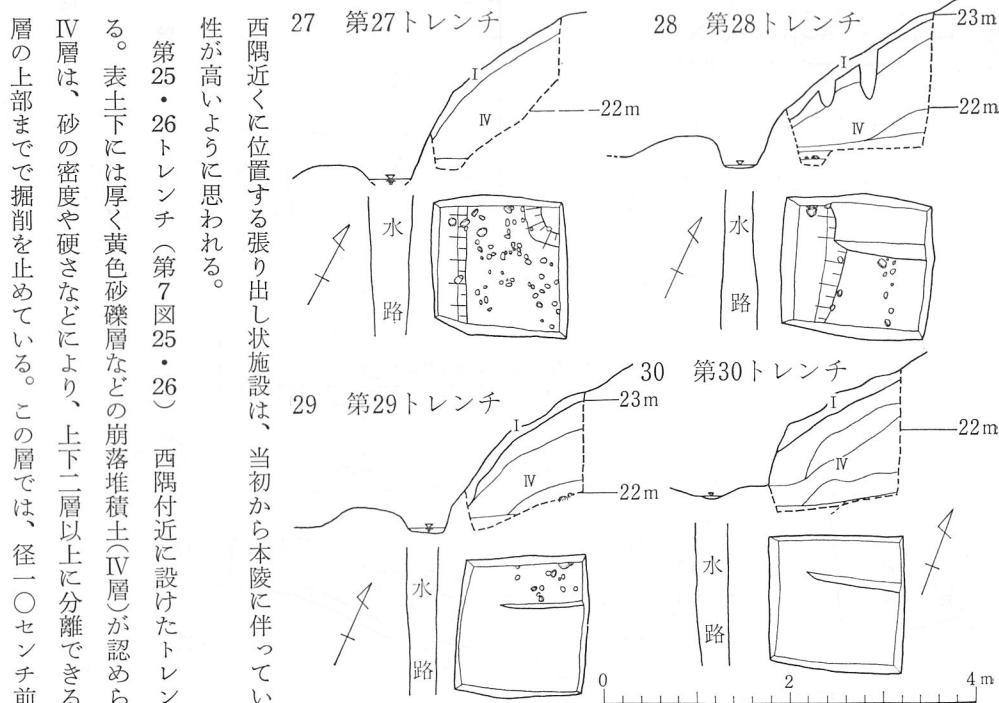
第22～24トレンチ（第7図22～24）内堤西隅から約二〇メートルのところに、幅約一五メートル、長さ約一五メートルの逆U字形に張り出した渡り土堤状の部分が認められる。この部分の基部に鍵状に二箇所、先端に一箇所、トレンチを設けた。22・23トレンチでは表土下に厚さ五〇センチ以上の黄色砂礫層など（IV層）が観察される。その下位には、粘質土層（Vc層）があるが、これは盛土と考えられる。22トレンチでは、IV層の下部にて、ややまとまとった礫群が認められる。この礫群は水路寄り、つまり北側部分では、径一〇センチ未満の小振りの礫によって構成されるが、南側部分では、二〇センチを越える大振りの礫より成る。しかし、両者ともに、礫相互間に秩序は認め難く、突き込んだような痕跡も認められない。傾斜も緩やかであることから、葺石の石材として利用された可能性はあっても、葺石として原位置を保つかどうかは疑問である。一方、24トレンチは、旧堤体の構造を比較的良好とどめていると言えよう。その構造は、前述の2・14トレンチの状況に近い。つまり、地山上面がわずかながら内濠寄りの傾斜面を有し、その上位に盛土されているのである。旧堤体の外法面は削平され、葺石はほとんどとどめて



第7図 惠我漢伏岡陵トレンチ平面および断面(5) (1/80)

いない。しかし、南側の部分で検出された径一〇～二〇センチの礫群は、灰色粘土層に突き固められたような状態を示し、葺石としての本来の位置を保っている可能性もあるようと思われる。旧堤体を覆つている崩落堆積土(IV層)は、中途に礫層を含み、上下二層に分けられる。上層は、焼土・炭化物が観察され、埴輪片を多く含む。下層では、埴輪片はほとんど認められない。IV層から中近世の土師器皿の小片が検出された。上述のように、Vc層は、22～24トレンチのいずれにおいても確認されている。中央部では若干厚みを増すと思われるが、現状では標高二一・八メートル前後となっている。24トレンチ東区の状況からみて、この張り出し部分が、本陵の当初から設けられた施設であった可能性は高いと言えよう。22トレンチIV層を中心に、楯形埴輪の破片などが比較的まとまって出土している。

陵前西側の内堤外法に設けた一三ヵ所のトレンチを通じて、次のような点が理解できよう。該所の東部、12～14トレンチでは、外堤・外濠の検出が期待されたが、明確にしえなかつた。12・13トレンチでは、比較的浅い位置で、地山らしきものが確認されている。14トレンチで検出された池沼堆積土も、そのまま本来の周濠の堆積物とは考えられない。しかし、外濠が池沼化し、さらには水路と化していくプロセスを迎ることはできる。また、このトレンチでは、地山整形などの堤体構築に伴う構造をうかがうこともできる。旧堤体は、24トレンチの一部に旧状をとどめている可能性はあるものの、全体的に大きく損われていると言えよう。



第8図 恵我藻伏岡陵トレンチ平面および断面(6) (1/80)

第27トレンチ 第28トレンチ
27 28
西隅近くに位置する張り出し状施設は、当初から本陵に伴っていた可能性が高いように思われる。

第29トレンチ 第30トレンチ
29 30
西隅付近に設けたトレンチである。表土下には厚く黄色砂礫層などの崩落堆積土(IV層)が認められる。IV層は、砂の密度や硬さなどにより、上下二層以上に分離できるが、下層の上部まで掘削を止めている。この層では、径一〇センチ前後の礫

が散在して検出された。25トレンチでは、黄灰色粘質土(IV下層)から径三〇センチを越す礫が一個出土した。埴輪片、瓦片などが出土している。

内堤西方の外法面の各トレンチの状況

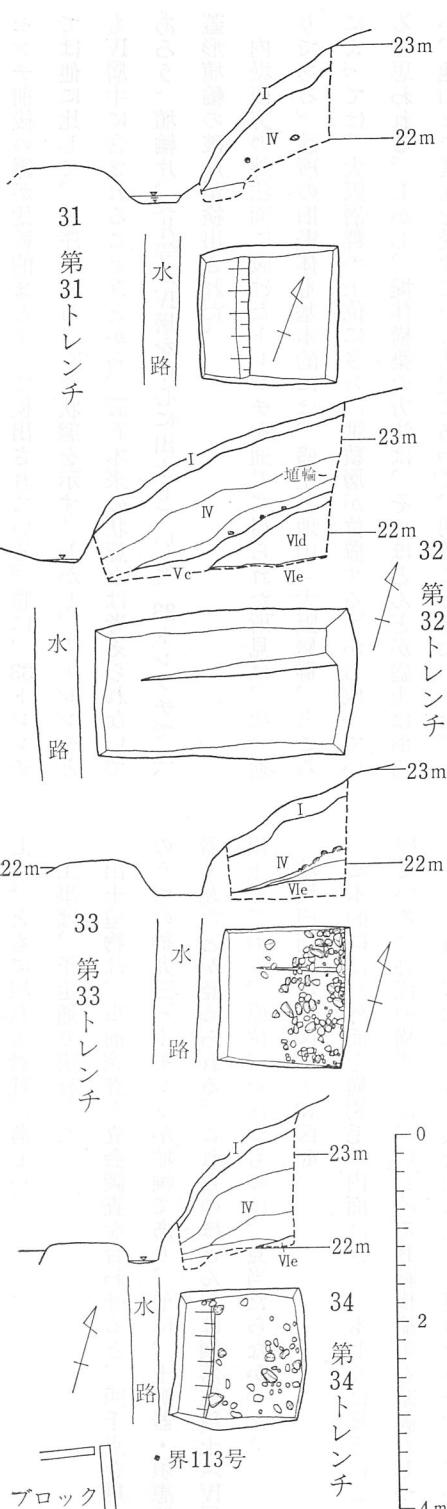
第27～30トレンチ(第8図27～30) 27トレンチから34トレンチは、

前方部内堤西方の外法面に二〇数メートルの間隔をあけて設けた。27～30トレンチの土相は、前述の25・26トレンチに類似している。ただし、礫が比較的まとまって出土したのは、27トレンチのみである。28トレンチを中心にして述べてみたい。表土下には、数層に細分できる崩落堆積土(IV層)がある。その最上層は黒灰色を呈し、締りも悪い。おそらくは、近年の崩落土であろう。立会調査時の所見によると、掘削床面下三〇～

四〇センチで、地山である砂礫層(VIe層)を確認することができる。両者の間には、盛土と思われるものが認められなかつたところから、この地山も、かなり削平されていると見てよかろう。主にIV層から埴輪片・土師器片などが出土。

第31～34トレンチ(第9図31～34) 34トレンチは、内堤西隅の南約

一七〇メートルの地点にあたる。基本的な層序は、27～30トレンチに類似している。32トレンチでは、盛土として茶灰色粗砂層(Vc層)を認めることができたが、その上部は、大きく変異を受けている。32トレンチの地山は、洪積層(VId層)、および大阪層群(VIe層)から成っている。洪積層は、立会調査時の所見も合わせれば、31～32トレンチとその周辺にかけて確かめられるようである。33・34トレンチでは、径一〇



第9図 恵我藻伏岡陵トレンチ平面および断面(7) (1/80)

センチ前後の礫が比較的まとまって検出されている。特に、33トレンチでは他に比して、秩序があるような状態を示す。しかし、両トレンチともIV層中に含まれることなどから、葺石本来の状態とは考えられないであろう。埴輪片、瓦片等がIV層を中心に出土している。33トレンチでは、蓋形埴輪の破片が検出された。

内堤西方の外法面に設けたトレンチを通じて得られた所見は、次の通りである。該所の旧堤体も基本的には、盛土と地山（大阪層群、ところによつては、大阪層群の上位にさらに洪積層が位置する）から成つてゐると思われる。しかし、堤体構築の方法は、そのほとんどが盛土はおろか、地山まで変異を受けている状況にあって、明確にしえなかつた。

以上のように、今回の調査地に設けたトレンチのいくつかを通じて、旧堤体の内部構造の一部を明らかにし、また一部ながらも葺石などの堤体表面が遺存されている可能性を見出したものの、調査全体を通じて明らかにしえた点は少なかつた。

施工にあたつては、葺石の可能性のあるものを始め、その蓋然性のある礫群を保存するように設計変更し、その上で、実施した。

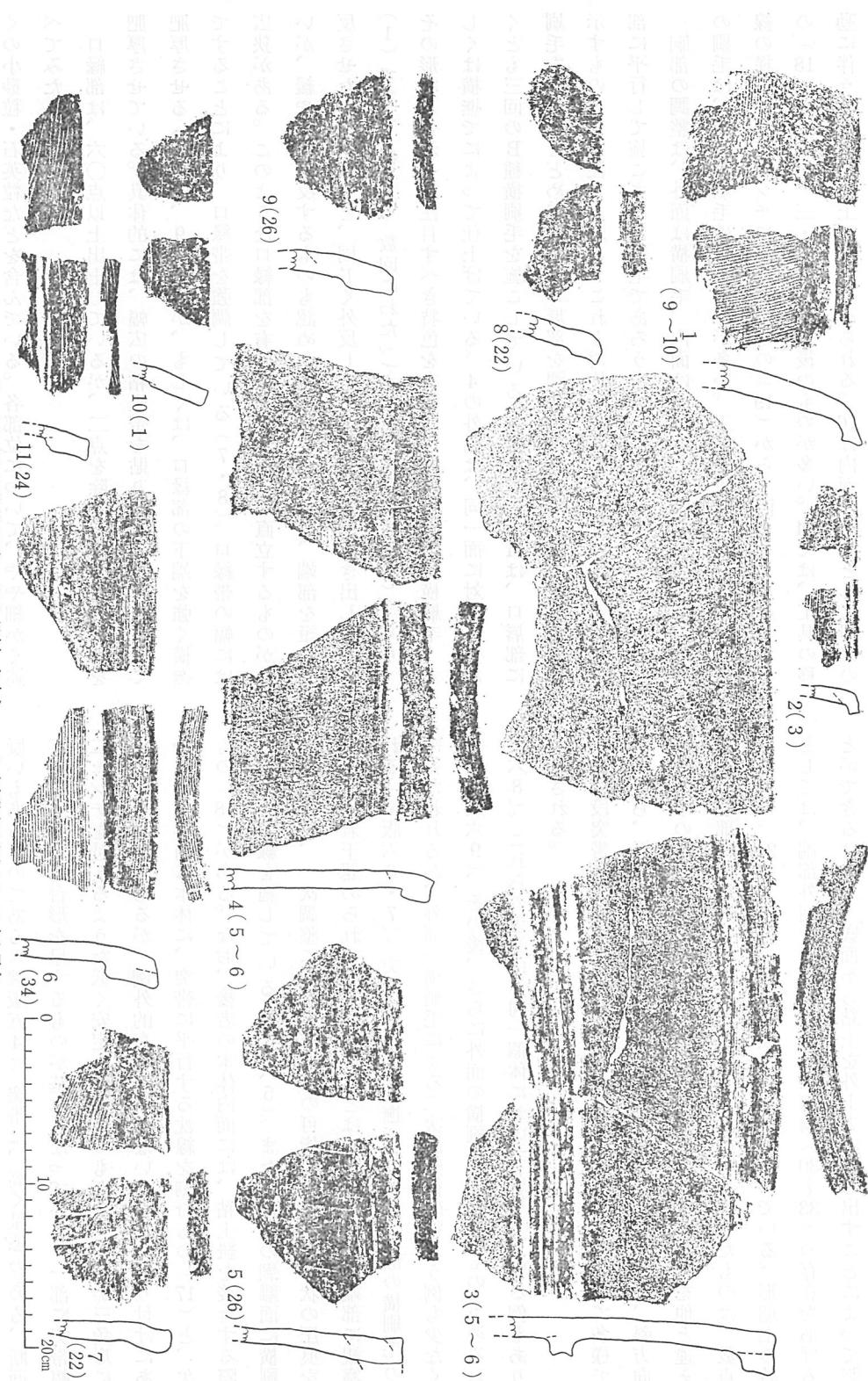
これらの内堤外法部分のほかに、第2図Aに示した、陪冢丸山古墳と史跡大鳥塚古墳の間の駐車場整備箇所（深さ二一〇センチ）、B・Cの、拝所の内濠に面する内堤内法裾の石柵補修箇所（深さ六五センチ）についても、掘削に伴う立会調査を行なつた。いずれも近年、工事の際に手を加えた箇所の再掘削である。Bでは、攪乱土の中から、埴輪二点が出土

した。ともに埴質で磨耗が著しい。工事は、予定通り実施した。

出土遺物は、事前調査と立会調査を合わせると、四千点を越える。そのうちの約九三・八セントが埴輪であり、他に、土師器・須恵器・陶磁器・瓦などが認められる。これらのほとんどは崩落堆積土（IV層）から出土しており、原位置を保つものは、見当たらなかつた。

埴輪円筒（第10図1～13図40）

基本的には、外面を横刷毛、内面は撫で、もしくは刷毛によつて仕上げている。外面の横刷毛は、いわゆるB種横刷毛を基調としつつも、縱毛も少なくない。これらの刷毛目の中には、一見、撫でと見違えるようなく極めて細かい刷毛目が多く認められ（図版五1～3）、後述する口縁部の形状と共に、本陵出土品の大きな特徴となつてゐる。口径は四〇～五〇センチ、底径三七～四五センチに復元されるような大形の製品が多い。もつとも小破片が多いため、この法量内におさまらない製品も多々あると思われる。突帯間の計測が可能なものは数点しかないが、一〇～一一センチを測る。突帯の数については不明である。透し孔は全て円形を示す。焼成は、赤褐色系の色調を呈する埴質のもの、堅緻な焼成の須恵質のもの、および両者の中間的な焼成を示すものがある。その出土比率は、小片が多いため、一概には言えないが、現状では埴質のものが若干多い。赤色塗布を行なつた例もある。黒斑は認められない。胎土は多



第10図 惠我藻伏岡陵の出土品(1) (1/4)

()内数字は出土トレシチ名を示す。

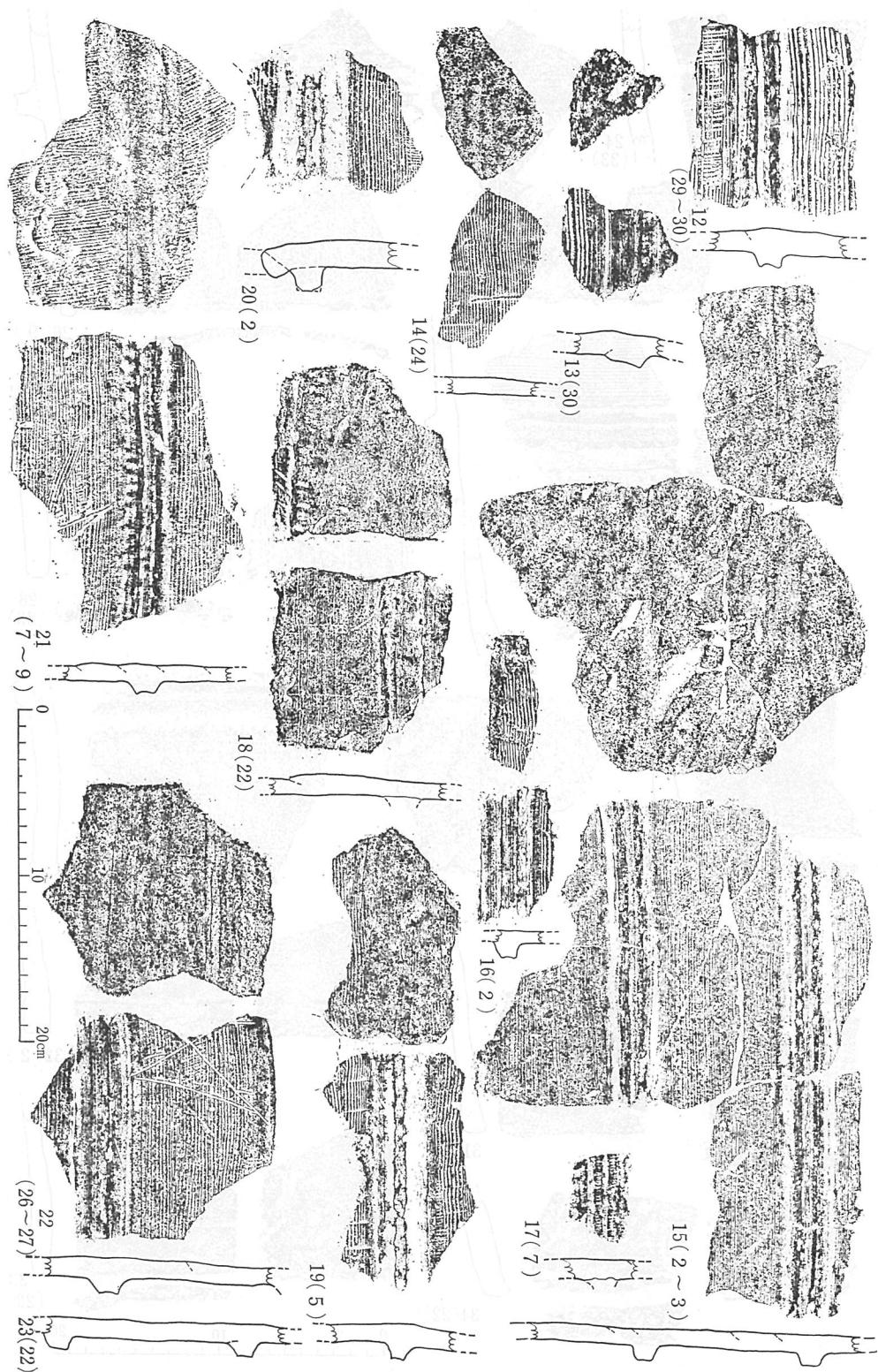
くの小砂粒・石英粒などを含んでいる。各部位について、やや細かく述べてみたい。

口縁部は、六〇点以上出土しているが、二点を除き、全て、口縁部を肥厚させている。具体的には、幅広の粘土帯を貼り付けることによつて肥厚させる（3～6、9～11）か、もしくは、口縁部の下端を強く横撫ですることにより、口縁帯を強調している（7・8）。口縁帯の幅には広狭がある。このような口縁部を有するものは、ほぼ直立するものが多いが、緩やかに外反するものも認められる。他の二点は、端部を短く外反させたもの（2）と、同じく外反して、端部を上下にひき出したもの（1）である。後者は、数回にわたって、外面に縦刷毛を施しており、その形状と合わせて注目すべき特色を有す。口縁帯外面は、横刷毛、もしくは横撫でによって仕上げている。4の外面は、同一面に対してもなくとも三回のB種横刷毛を施こしている（図版五3）。11は、口唇部に刷毛を波状にとどめており、口唇部を調整する際の工人との位置関係を示すものとして注目される。これと対比されるのが、6のような、口唇部に平行して施こされた刷毛であろう。

胴部の調整は、外面は横刷毛、内面は撫でもしくは刷毛である。外面の刷毛は、B種横刷毛によるものが多い。工具を止めた際の痕跡たる条線の横幅は、二センチに満たないもの（19）から、四センチを越えるもの（18）まである。三・五センチ前後のものが多い。14では、工具の移動に伴う粘土の盛り上がりが認められる。16は内面の調整として叩きの

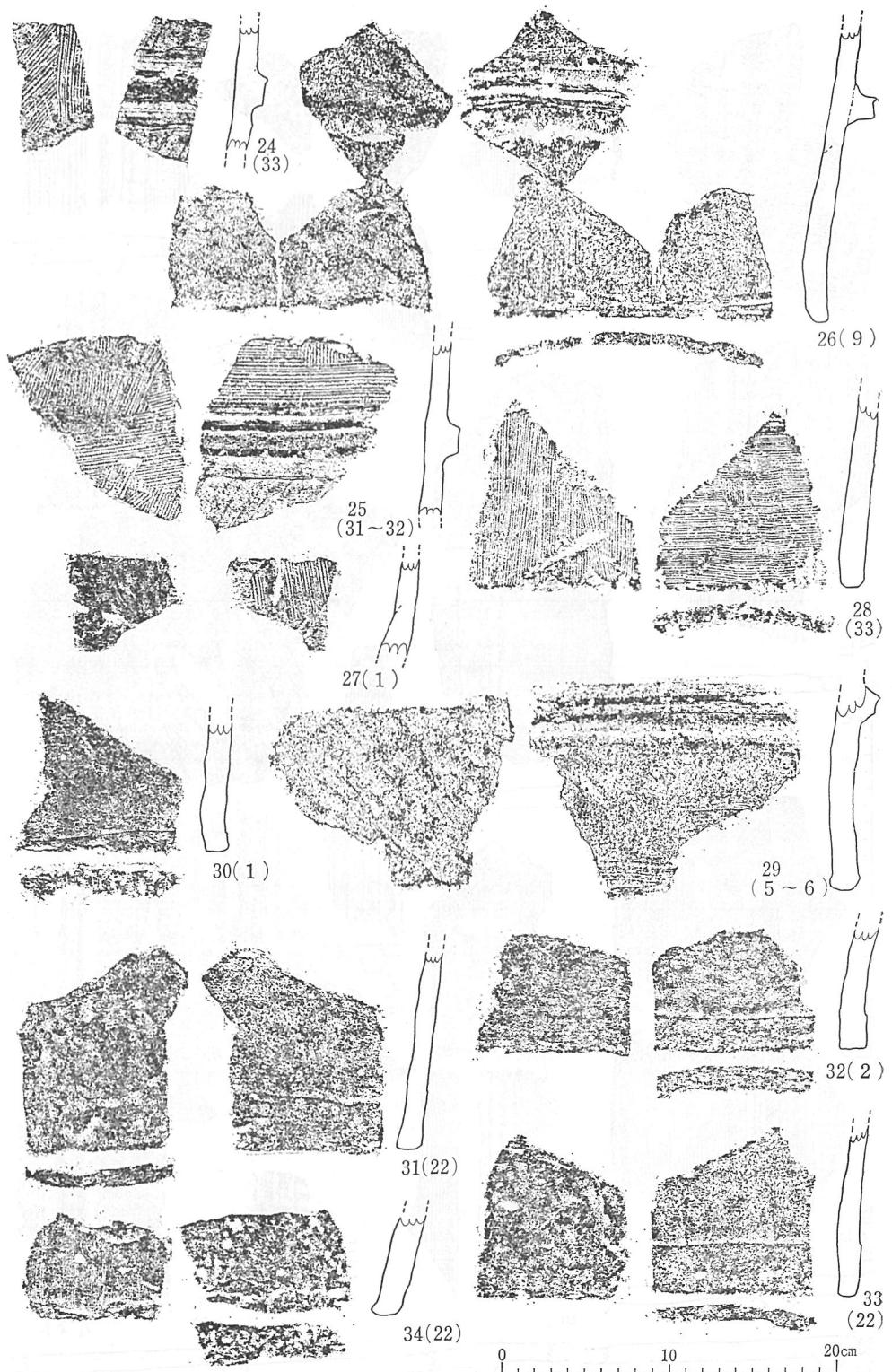
字形、もしくは台形を呈するものが基本となつてゐる。一部に突帶幅が二センチを越えるような低く安定した形状のものや、断面が三角形に近いもの（13）があるが、例外的存在でしかない。突帶の貼り付けについては、事前に本体に、突帶に平行する沈線を刻むもの（17）と、欠くもの（18）がある。なお、後者の本体内面には、粘土紐を接合する際に斜方向の刻線を施している（図版六5）。また、突帶の剥離面に横刷毛が認められ、一次調整に縦刷毛未使用の可能性がある。布状の圧痕をする例も若干認められる。そのほとんどは、突帶の側面の端部に観察される（図版六6・7）。突帶の上下の横撫では、多く外面の横刷毛の前面に行なわれるが、外面の横刷毛による二次調整後に行なう例も少なくなく（図版六9）、その後、さらに外面の横刷毛を加えるものもある（図版六8）。これらの手法は、同一個体において共存している例もあり、注目される。

最下段突帶から底部にかけての外面の調整は、胴部に比して多様である。則ち、縦刷毛によるもの（26・27）、横刷毛のもの（28）、斜方向の撫で付けのもの（24・25）などがある。27は、胎土・色調を他と違えており、胴部の破片の可能性もある。撫で付けを施したものは、数点認められる。24は、上位の段にも撫で付けを行なつてゐる。形態上の特色としては、端部外面を若干肥厚させた埴輪（30～33）の存在をあげることができる。30は、底面から粘土を外上方に押し出すことによつて肥厚

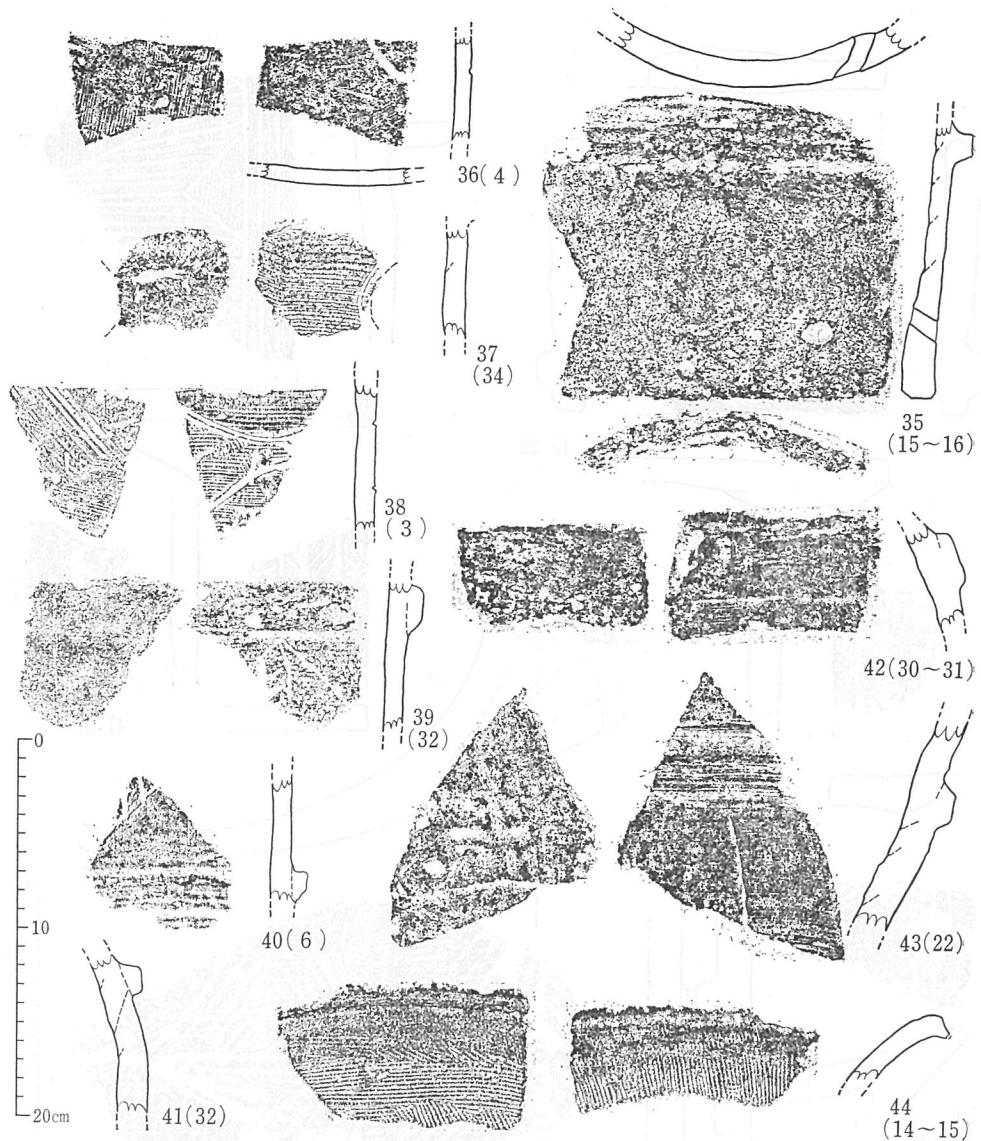


第11図 惠我藻伏岡陵の出土品(2) (1/4)

(N.D.) 惠我藻伏岡陵の出土品(2) (1/4)



第12図 恵我藻伏岡陵の出土品(3) (1/4)

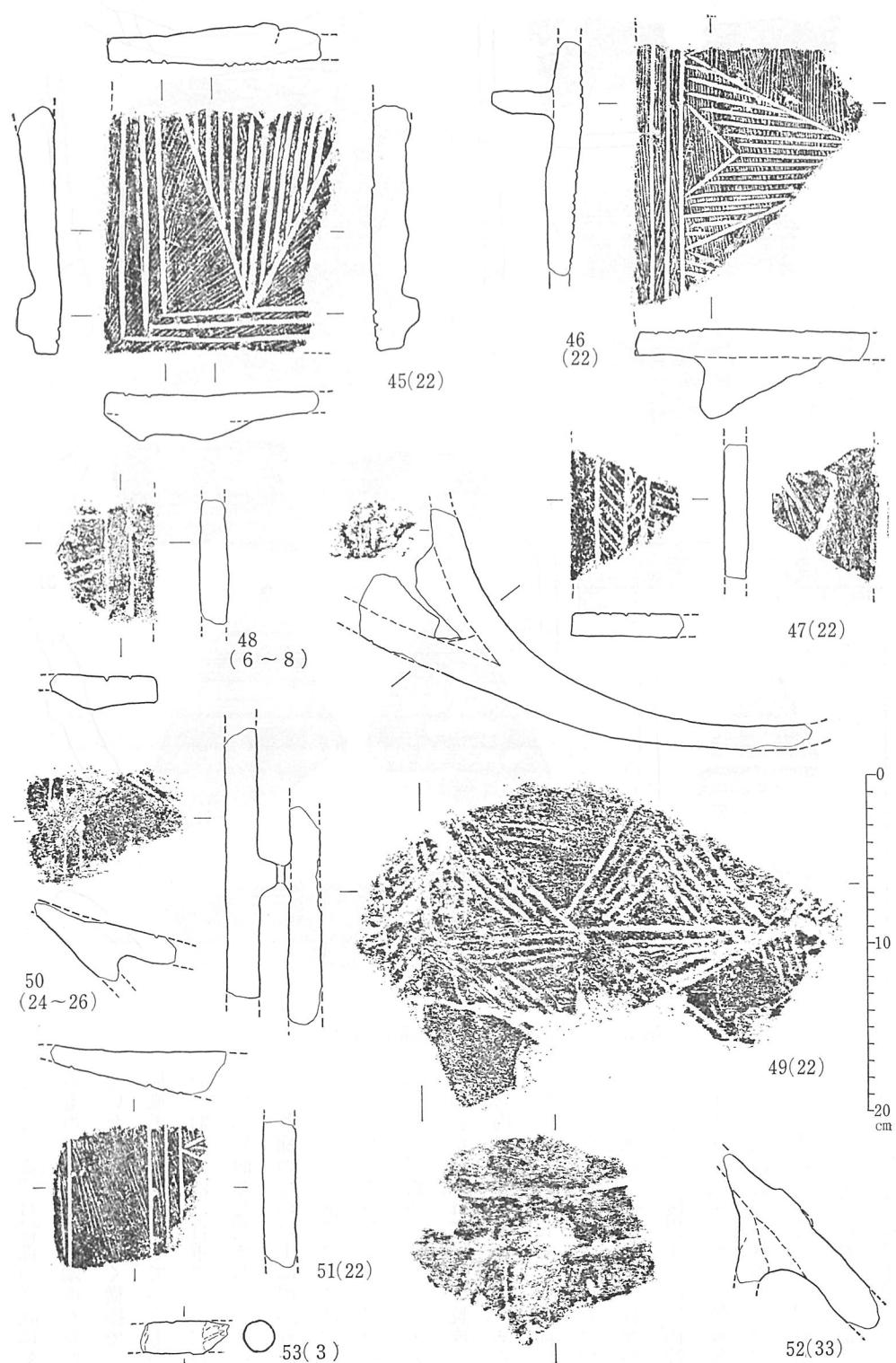


第13図 恵我藻伏岡陵の出土品(4) (1/4)

させている。口縁部の形状に対応するものであろうか。端面を肥厚させていないものは、強く横撫で(26)、横刷毛(29)を施しているものが多^い。34などは、自重のため、底面が内側へ屈曲した例である。また、底面に蕪様のものの上に置かれた痕跡をもつものもある。35には、底面から約三センチのところに、やや上位に向けて、斜めに径一〜一・五センチの孔が穿たれている。焼成前に外から内に穿孔されたものである。

21・22、36~40として胴部に刻線を施した例をあげておいた。同一の文様構成のものは認められない。

つまり、本陵出土の埴輪円筒は、調整手法や突帯の形状、焼成等に若干の差異は認められるものの、口縁部の形状などに関しては、見事なまでに画一化が計られており、作りも、比較的丁寧である。本誌前号および



第14図 恵我藻伏岡陵の出土品(5) (1/4)

前々号で報告した白鳥陵出土品などに比して、大きな特徴と言えよう。

朝顔形埴輪（第13図41～44）

口縁部（44）は大きく外反し、端部を下方にひき出した形態のものである。他は、胴部から花芯部に向かう肩部（41・42）と頸部（43）の破片である。肩部の突帯は、形状に差がある。43は厚手の製品で、胎土などに他とは異なった特色を有す。

形象埴輪（第14図49～53）

楯や蓋などを象つた器財埴輪が出土している。そのほとんどは、楯形埴輪である。赤色の塗布を行なった例もある。須恵質のものは認められない。

楯形埴輪（45～51）

49を除き、天地左右を明確にしえない。実測図に示したような位置にて説明を加えたい。45・46は、表面を粗い刷毛にて調整した後、側縁に三条の平行沈線を沿わせ、内側に鋸歯文を刻している。ただし、45では、鋸歯文が外向きに表現されているのに対し、46では内側に向かっている。45の裏面は、指撫でのため、凹凸が著しく、下縁に沿って、最大高一・五センチ、幅一・五～二センチ、長さ九センチ、幅一・五センチ、長さ八センチの直角三角形の突起を貼付する。その意図を明確にしえないが、側縁を補強するための処置であろうか。

47では、側縁に沿う綾杉文が認められる。49・50は、円筒部と粘土板との関係を知ることのできる資料である。49では、円筒部と粘土板と

した後、円筒に接する部分の間隙に別の粘土を充填し、さらに補強のため、部分的に幅約一・五センチの三角形状の粘土板を挿み込む。表面には、鋸歯文・綾杉文などが刻されている。鋸歯文の内側の充填の仕方が、45・46とは異なっていることは注意しておくべきであろう。

蓋形埴輪は、可能性のあるものを含めると二点出土している。52は笠部の中央部付近の破片である。扁平な突帯を繞らし、直交する沈線が認められるが、磨耗のため、一条しか確認できない。基台部と笠部の接合にあたっては、接合部に粘土を充て、補強を計つていて。

53は、径一・八センチ、現長五センチを測る。磨耗が著しい。反りは、あまり認められない。堅魚木であろうか。

弥生土器

外面に粗い叩き、内面に刷毛をとどめた、V様式の甕の小片がある。

土師器（第15図54・55）

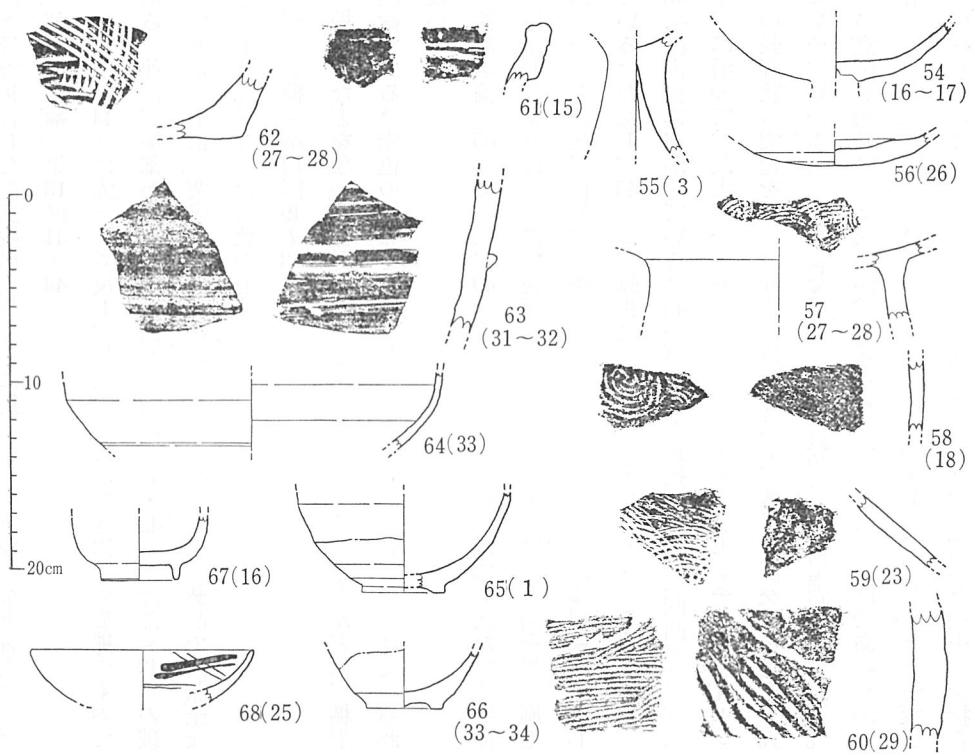
高杯などが出土している。54・55は、いずれも磨耗が著しい。55では内面に、絞り痕が認められる。その他、中近世の小皿が24トレンチから出土しているが、小片のため、図示できなかつた。

土師厚盤（第15図56）

厚手の製品である。外面に粗い叩き、内面に横刷毛を施している。焼である。

須恵器（第15図56～59）

55は、杯身か杯蓋か不明である。一応、身として図示した。底部外面



第15図 恵我藻伏岡陵の出土品(6) (1/4)

は籠削りによって仕上げているが、輦轄の回転方向は判らない。57は、器台の杯部と脚部の接合部分である。杯底部に同心円文をどめている。58・59は甕の体部破片。58は外面に平行叩き、内面に同心円文が認められるが、その後、両面ともに、軽く撫でを加えている。59の外面は、自然釉を帶びている。

陶器（第15図61～64）

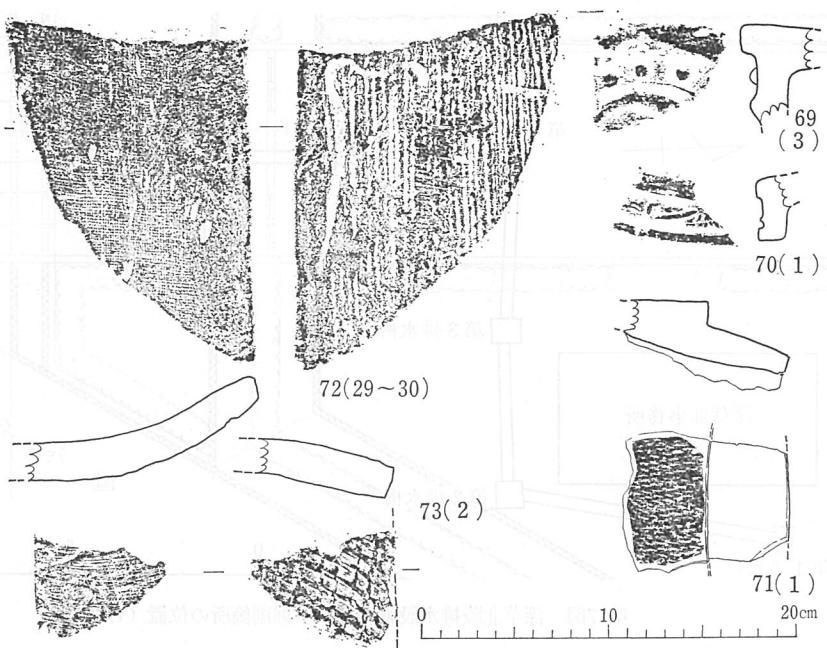
61～63は、備前焼である。61は垂直に近く立ち上がる口縁部であり、外面には、二条の凹線を繞らす。内面には、浅く繊細な卸し目が認められる。62の卸し目は、彫りが深い。63は広口壺の体部である。器壁の厚さに比して華奢な觀をもつ断面三角形の突帯を伴う。突帯の上面には、灰を被っている。檜崎氏より十二世紀までさかのばるとの教示を得た。64は灰釉鉢の体部。外面の底部に近い部分には施釉していない。

磁器（第15図65～68）

65・66は、唐津産の灰釉碗である。体部外面の下半は無釉である。65のほうが、体部に丸味を有す。67は京都産のいわゆる半磁器である。疊付のみ無釉である。68は、やや浅い碗である。内面に濁ったコバルト色の下絵付がある。伊万里産。その他、小片のため図示しなかったが、明代の白磁碗などがある。

瓦（第16図69～73）

一一五点出土しているが、鎧瓦・字瓦は各々一点を数えるのみであ



第16図 恵我藻伏岡陵の出土品(7) (1/4)

る。焼成は、瓦質のものが多く、須恵質のものは少ない。二次焼成を被つたものも含まれている。鎧瓦(69)は、径一三センチ前後に復元できる小振りの製品である。内区に細い尾を伴う巴文を有し、外区に間隔の

あいた珠文を配す。両者の間に圈線は認められない。宇瓦(70)は、厚さ三・三センチを測る。中心飾付近の破片である。唐草文が展開している。丸瓦(71)は短く下向する玉縁を有す。筒部凸面では、縦位の繩叩きの後、同一方向に軽く撫でている。凹面には、布目痕をとどめている。平瓦には、凸面に、繩叩き(72)と粗い格子叩き(73)のものがある。量的にはほとんどが前者である。丸瓦・平瓦とともに側端面は、緩やかな角度で大きく面取られているものが多い。

(福尾正彦)

深草北陵排水設備改良工事箇所の調査

後深草天皇以下一三方を合葬する深草北陵には、深草部事務所が置かれている。その排水設備を改良して京都市の下水道に接続することとなつた。昭和五十七年五月十・十一日の両日、第17図に示す排水路の掘削に立会つて調査した。

調査の結果、遺構は検出されず、盛土中から遊離した状態の土器片等が採集されたのみであった。予定通り、工事を行なつた。

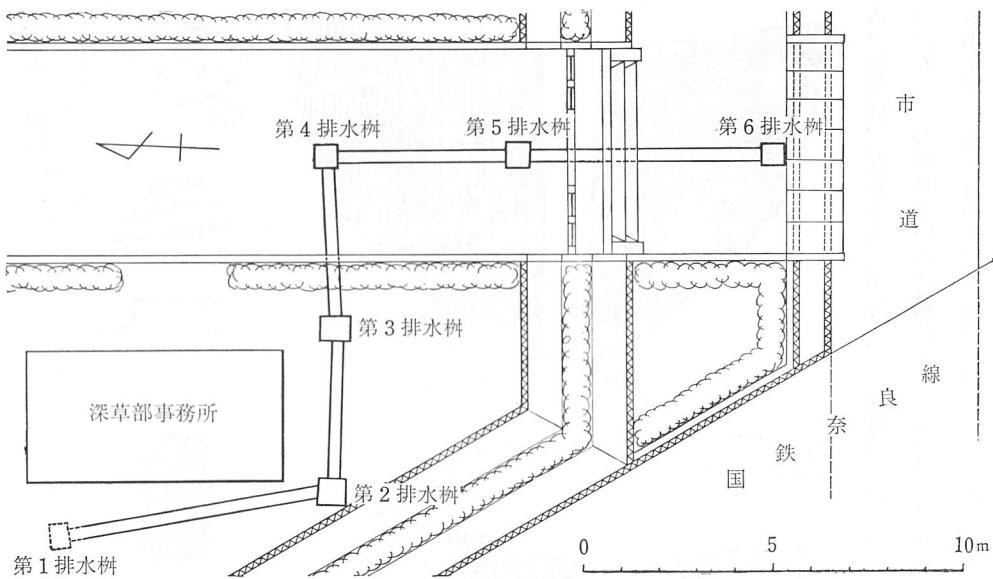
基本的な層序は次のとおりと思われる(第18図)。

I層 表土。小砂利まじりの黒色土。

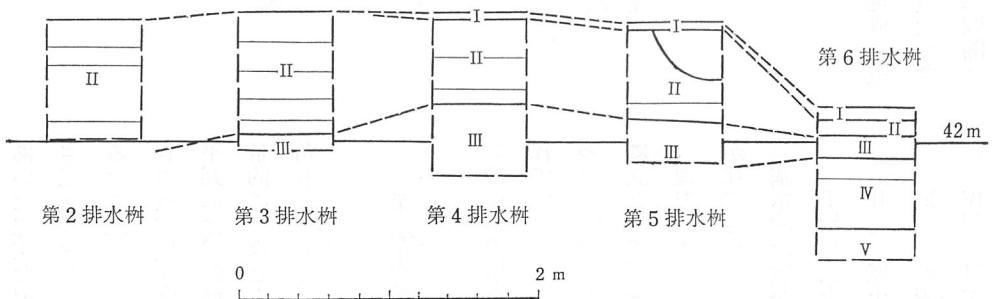
II層 盛土。黄・黄褐色または茶褐色の砂質土。一部に攪乱が入る。

III層 旧表土。黒灰色粘土。

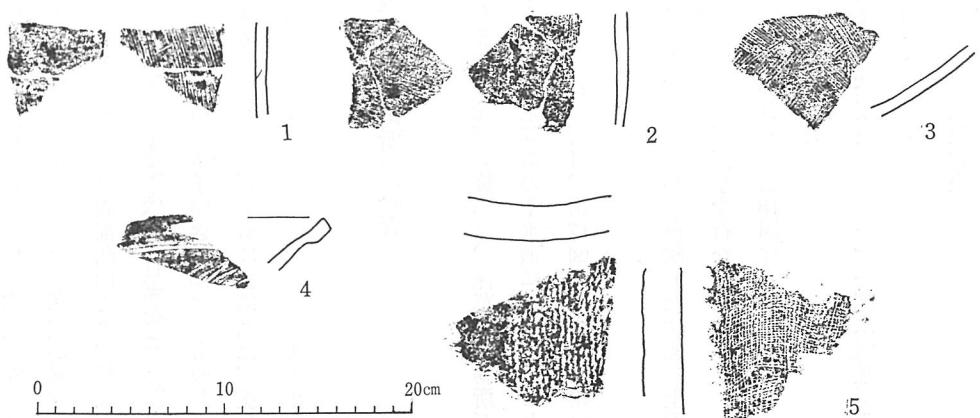
IV層 自然堆積層と思われる黒灰色粘土。



第17図 深草北陵排水設備改良工事掘削箇所の位置 (1/200)



第18図 深草北陵排水樹の地層 (柱状図) (1/50)



第19図 深草北陵の出土品 (1/4)

V層 地山。

I～IV層は、昭和四十九年度の調査でも認められた（本誌第27号）が、このたび、その性格の一部が明らかとなつた。旧地表が確認され、それより上のI・II層は盛土であることが判つた。なお、III層は、IV層の一部と考えることもできる。

出土遺物は、土師器・須恵器・陶器・瓦など三六点である。いずれもII層中から出土し、他所から運ばれてきたものである。

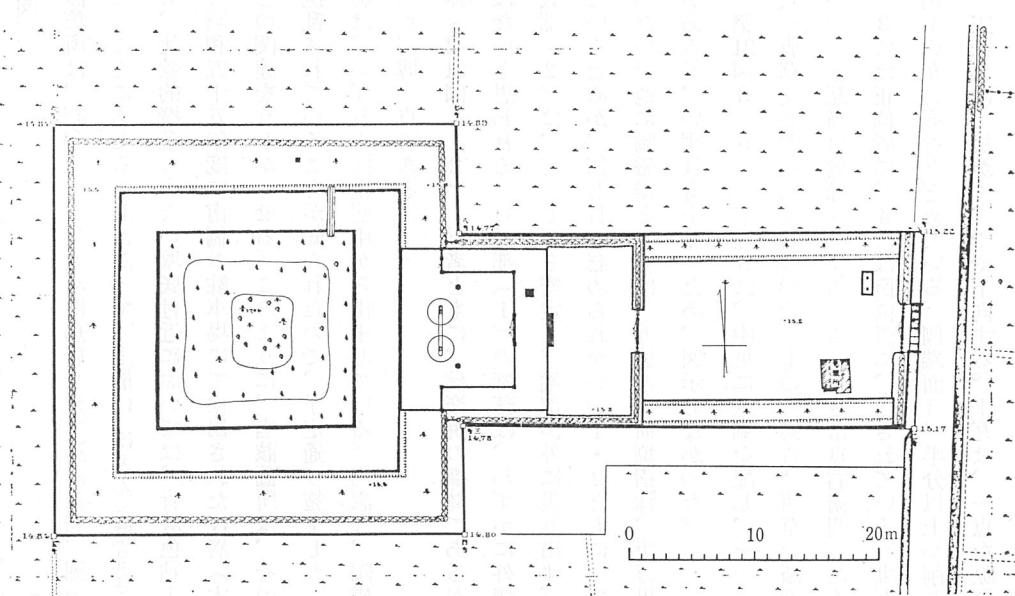
土師器（第19図1～3）　甕または鍋と思われる破片である。内面刷毛・外面撫でのもの、両面刷毛のものなどがある。前回の調査でも同種のものが出土している。ほかに、皿または壺の底部らしいものがある。須恵器（第19図4）　甕と思われる口縁部片。内外面に自然釉がかかる。外面に櫛描き列点文を配する。

陶器　鉄釉を施した炻器質の破片がある。
瓦（第19図5）　布目のある平瓦。

（笠野 肇）

白河天皇の成菩提院陵の鳥居を建て替えるにあたり、昭和五十七年九月十一日に立会調査を実施した。掘削は、鳥居の南北の柱の周囲を、それぞれ一メートル四方、深さ一・六メートル、手掘りによつて行なつた

成菩提院陵鳥居建替工事箇所の調査



第20図 成菩提院陵調査箇所の位置（○印部分）（1/600）

(第20図)。

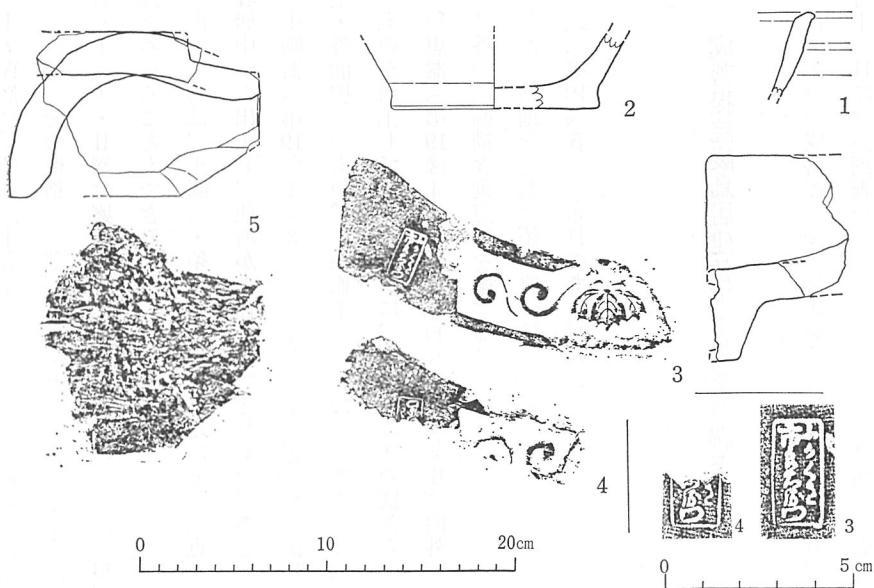
当該箇所は、昭和二十八年度に旧鳥居を建て込んだ際、掘削し、埋め戻したところにある。したがって、土層は、ほとんど攪乱されていた。ただし、比較的攪乱の少ない壙底付近においては、青灰色粘土層が検出され、昭和五十五年度に南側の駐車場にて検出されたIV層（本誌33号参考）との関連をうかがわせる。このように、当該箇所は、そのほとんどが、攪乱されていることが知られたので、予定通り施工した。

遺物は、いずれも攪乱層中から出土している。内訳は、陶磁器五点、瓦一四点、博一点である。

陶器（第21図1・2） 両者ともに、信楽焼の擂鉢であるが、同一個

体ではないと思われる。口縁部（1）の端部は、わずかに外側に突出する。底部（2）は、どっしどと安定し、端部が外に張り出す。内面は磨耗しているためか、御し目は認められない。1・2ともに、施釉はなされていない。他に陶磁器としては、近世の備前焼摺鉢、伊万里染付四方浅鉢があるが、いずれも小片のため、図示しなかった。

瓦（第21図3～5） 宇瓦3は、中央に鬼桐を配し、その上位から、巴文状の唐草文が左右二転する形状のものである。唐草の断面は、三角形を呈する。瓦当の側縁は広く、「ふかくさ市良右衛門」なる瓦屋の刻印が、3では正位置に、4では倒位置に、なされている。丸瓦5は、凹面に細かい布目痕をとどめている。側端面は、半分以上が削り取られている。玉縁部は、短かく、やや下向する。平瓦は、一点を除き、両面と



第21図 成菩提院陵の出土品（1/4）

も撫でによつて仕上げられている。平瓦の一部に、須恵質の焼成を示すものがあるが、ほとんどが、表面を黒灰色に燻した瓦質のものである。

他に瓦質の壇の小片がある。厚さ三・五センチを測る。

(舟瀬利昭・福尾正彦)

後嵯峨天皇以下三方火葬塚外構柵改修工事箇所の調査

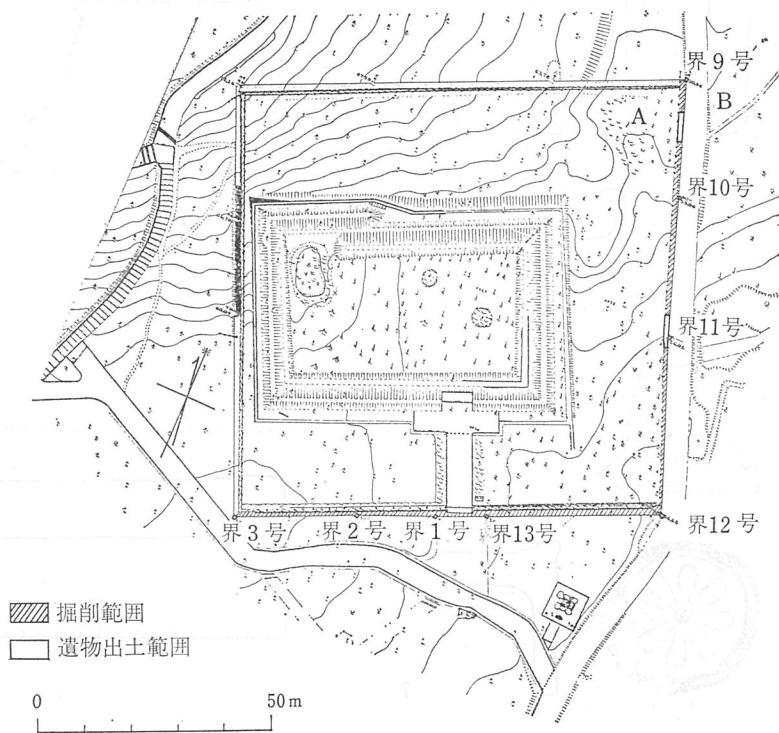
後嵯峨天皇以下三方火葬塚の外構柵改修工事を行なうにあたり、昭和五十七年十一月十六日から五十八年一月二十九日までの施工期間中、立会調査を実施した。

工事箇所は、火葬塚境界線上の南側八七・三〇メートル（界一二号と界三号）と東側九一・八〇メートル（界九号と界一一号）の境界線上で、二メートル間隔に、長さ〇・六メートル、幅一メートル、深さ〇・六メートルの掘削が行なわれた。立会調査の結果、何等の遺構も検出されなかつた。

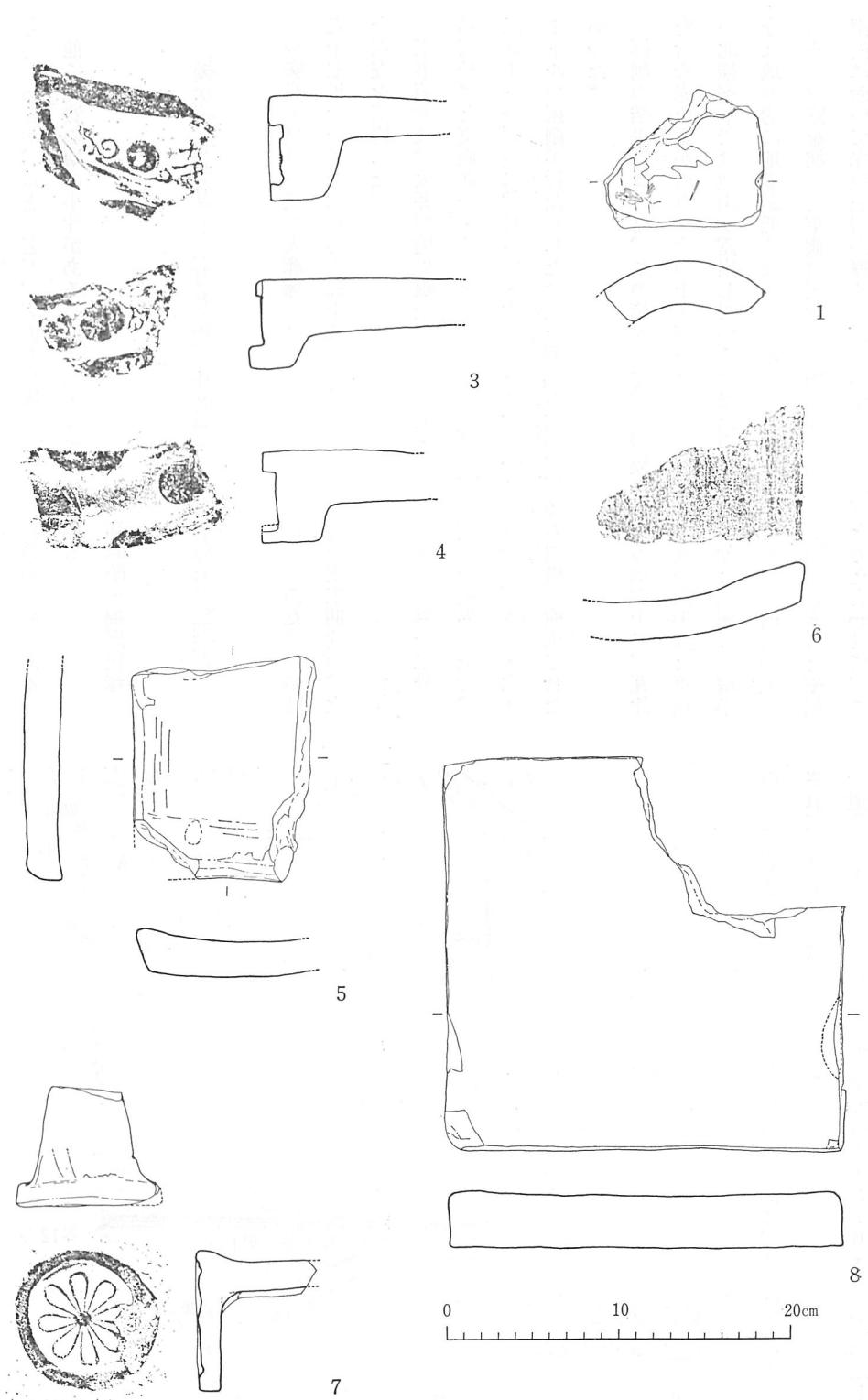
掘削の結果によると、この箇所の地盤は岩盤からなる地山上に、瓦片を含む赤色土がのり、その上が表土となつてゐる。南側の東半分と東側の北端寄りでは地山が露出してゐる。また南側の東半分と東側の約南半分は地形的に地盤が低くなつていてもかかわらず、火葬地内は平坦である。道路を挟んで東側の天竜寺境内が極端に低くなつていてことや掘削内において赤色土層が厚く、地山に至らない状況と考え合わせて、こ

の赤色土が盛土であり、本火葬塚地の東南部は、この盛土によつて整形されているものと考えられる（第22図）。

遺物は東側から瓦類一五点（第23図1・3・6・8）が出土し、境界



第22図 後嵯峨天皇以下三方火葬塚立会調査箇所の位置 (1/400)



第23図 後嵯峨天皇以下三方火葬塚の出土品 (1/4)

内北東北隅のA地点から一点、隣接する天竜寺との境界付近B地点から二点（2・7）の瓦類がそれぞれ表面採集された。その種別は、丸瓦二点、宇瓦四点、平瓦九点、棟込瓦一点、博一点、鬼瓦と考えられるもの一点である。

その主なものは、次のとおりである。

丸瓦（第23図1）

筒部か玉縁部かの区別は不明瞭である。径は小さい。凹面に細かい布目痕が残る。側面は箒削りされ、さらに下縁を面取りしている。凸面は箒削りの後、撫で調整を施す。また、部分的に刻目や刷毛目のような痕跡が残る。胎土はやや粗く、焼成も良好とは言えない。色調は凸面が黒色、凹面が灰色を呈する。

宇瓦（第23図2・4）

三点とも瓦当正面に日輪あるいは月輪を表わす円盤を有しており、2と3には雲文が伴っている。さらに2には「寺」の一文字が残っており、寺名も施されていたことが分る。頸部は三点とも浅鉢である。頸部から凸面の一部までに横方向の撫で、それ以後に縦方向の撫でが施される。凹面は2・3が縦方向の撫でを施し、4は不明瞭である。胎土は砂粒を含み、やや粗い。焼成も良好とは言えない。色調は黒色を呈する。

平瓦（第23図5・6）

一点とも広端面か狭端面であるのか区別ができない。5の凹面は端面寄りに横方向の撫でが施されている。端面および側面も撫で調整されて

おり、端面上部に丸味をもたせ、側面上部縁は面取りされている。凹面にはかすかに糸切り痕が残る。6は凹面に細かい布目痕が残り、側面寄りには縦方向の箒削りがなされている。側面も箒削りされ、凹面側縁部は面取りされている。凸面は糸切り後、箒削りがなされている。胎土は粗く、焼成もやや悪い。色調は灰色を呈する。

棟込瓦（第23図7）

瓦当は薄く、单弁八葉の菊花文を内区主文とし、中房は小さく低い。瓦当部と筒部の接合面は凹凸両面とともに補強の粘土を張り、凸面には縦方向の撫でを施している。胎土はやや緻密で、焼成も他に比較して良好。色調は暗灰色を呈する。

博（第23図8）

平面形は正方形を呈する。表面には撫で調整が施され、裏面には糸切り痕がかすかに残る。側面は一部に布目痕が残るが、調整痕は不明瞭である。胎土は粗く、砂粒を含む。焼成もやや悪い。色調は暗灰色を呈する。約三三センチ四方、厚さ三センチ。

（小畑 実・佐藤利秀）

佐保山東陵山裾崩壊復旧工事箇所の調査

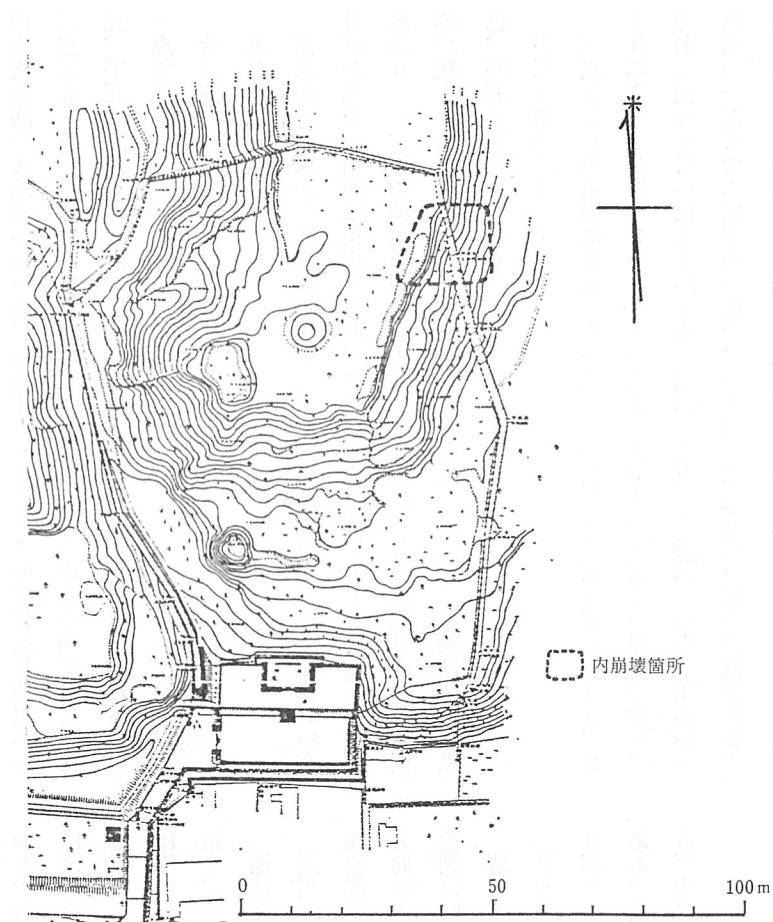
聖武天皇皇后天平応真仁正皇太后の佐保山東陵の東側崖地の一部が、五十七年八月の台風により、地滑りを起した（第24図）。多量の雨水が浸

潤したため、表層が滑落したものであろう。同年十二月二十七日から五十八年一月二十八日まで災害復旧工事を行い、この間、立会調査を実施した。工事は、当該地の境界線外側に石積み擁壁を、中腹に土留木柵を取り設け、陵域外の崩落土を埋戻すものである。露出した滑落面および埋

戻した土中に、遺構は認められなかつたので、予定通り、施工した。崩落土砂中から、土師器一三〇点・陶器三点・瓦質土器七点・骨片一点計一四一点の出土遺物が採集された。その大部分は小破片であるが、器形の分るものは多くが羽釜形蔵骨器で、墨書銘のあるものや骨片・骨粉の付着したものもある。

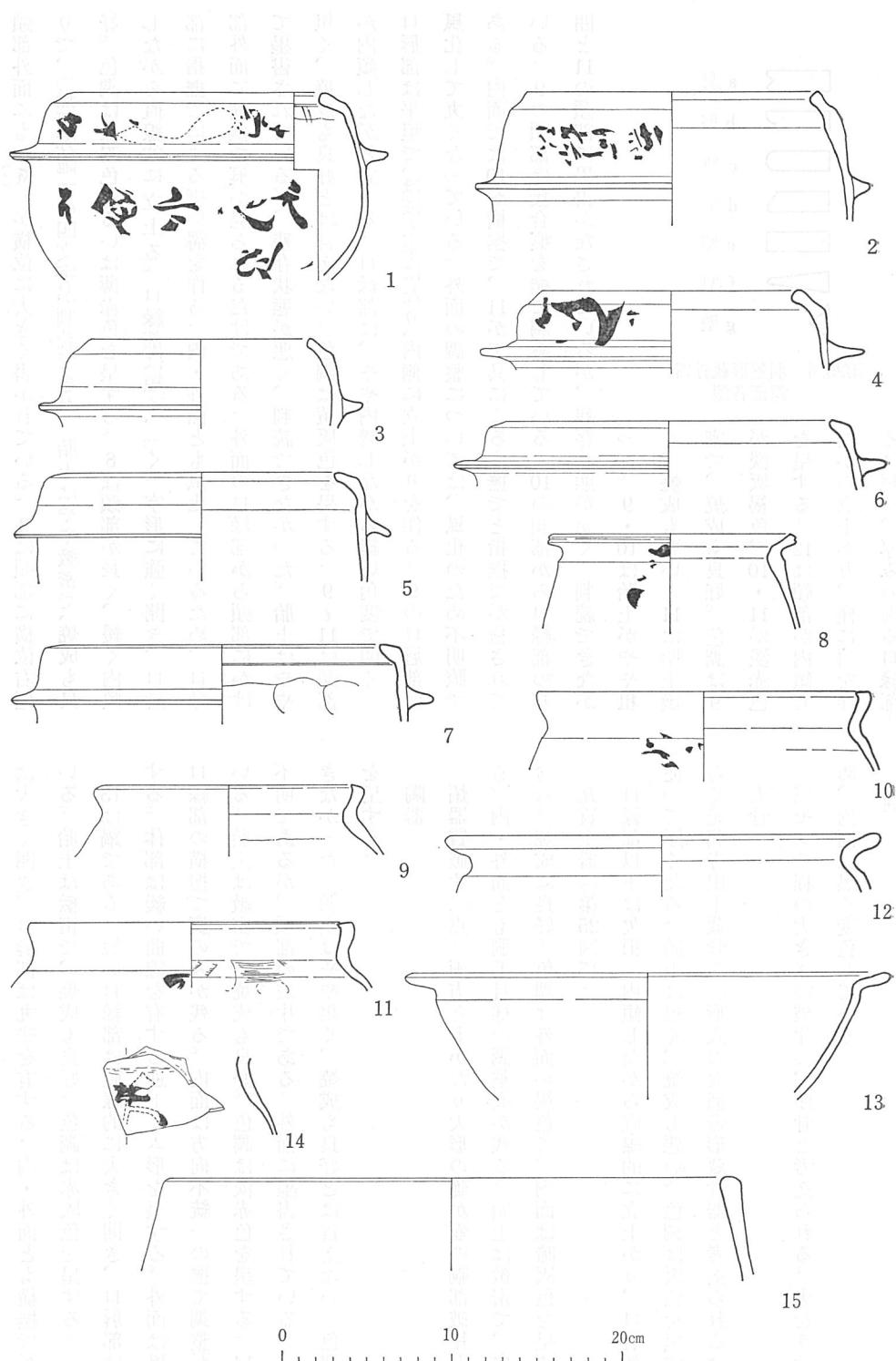
次に、主な遺物について述べることとする。

土師器（図版七1~4、第25図1~14）



第24図 佐保山東陵崩壊立会調査箇所の位置 (1/1500)

1~12は、羽釜形蔵骨器である。鍔部まで残存する1~7は、頸部が、ほぼ直立するか、やや内傾ぎみに立上る。口縁部は長短の差はあるが、共通して内側斜上方に折曲げている。このため頸部との境に肩を作る。2の肩部は他と比較して張りが弱い。胴部については、1と5のみで、他は欠損しているため全容を知り得ないが、おおむね鍔の下で僅かに開き、緩い曲線を描いて底部へ移行するようである。鍔の断面形は、元興寺出土蔵骨器の形式分類（第26図）によると、1がb型、2~7がc型に属する。内・外面の調整は横撫であることは指撫でを施している。1、2、4の外面には墨書きがなされている。1は外面全体に墨書きされているが、判読できたのは胴部の梵字「ムカシ」だけである。頸部・胴部とも字の廻転方向は不明。胴部の字は梵字からみて縦位と考えられる。4の

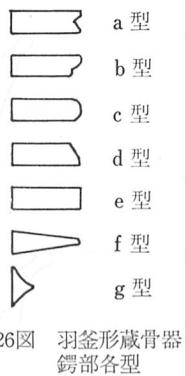


第25図 佐保山東陵の出土品 (1/4)

頸部外面にも「^(カ)」が横位に大きく書かれている。2は頸部に横位右廻りで、「無阿弥陀」の四文字が判読できた。胎土はやや緻密で、焼成も良好。色調は淡褐色あるいは薄赤色を呈する。8は頸部が長く、緩く内傾しながら直線的に立上る。口縁部は短く、「く」字形に強く開き、口唇部に指撫による細い溝を作る。内・外面とも風化しているため、口縁部外面に横撫で痕が見られるだけである。外面の口縁部から頸部にかけて墨書きされているが、残存状態が悪く、判読できなかつた。胎土はやや粗く、焼成も良好とは言えない。色調は黄灰色を呈する。9と11は頸部が内傾しながら立上る。口縁部は、やや内彎しながら緩い角度で開く。

口唇部は平坦で、ほぼ水平になり、内側に立上がりを作る。9の口唇部は

風化して丸くなっている。外面の調整については、風化のため不明瞭である。内面では10が横撫で、11が工具による横撫でと指撫でが施されている。9の頸部は接合痕を撫で調整している。10の頸部から口縁部の範囲と11の頸部に墨書きがなされているが、残存状態が悪く、判読できなかつた。9・10は胎土がやや粗く、焼成も悪い。11は胎土緻密で、焼成も良好。色調は9が淡灰褐色、10・11が淡赤色を呈する。12は頸部が内傾しながら立上がり、僅に肩を作れる。短く、厚みのある口縁部



第26図 羽釜形蔵骨器
鍔部各型

頸部外面にも「^(カ)」が横位に大きく書かれている。2は頸部に横位右廻りで、「無阿弥陀」の四文字が判読できた。胎土は緻密で、焼成も良好。色調は赤灰色を呈する。

13は鍋である。短い口縁部は直線的に大きく開き、口唇部は丸味を有する。体部は緩い曲線を有する逆ドーム形を呈する。外面は風化して、

口縁部の横撫で痕のみが残る。内面は方向不統一の撫で調整が施されている。胎土は緻密で、焼成も良好。色調は淡赤色を呈する。14は器形が不明であるが、頸部の破片である。外面に墨書きされているが、判読はできなかつた。胎土はやや粗く、焼成も良好とは言えない。色調は薄赤色を呈する。

陶器

炻器質破片二点。両方ともかなり大形の甕か壺の胴部破片と考えられる。内・外面とも刷毛目様の調整痕が残る。胎土は緻密で、白色砂粒を含む。焼成は良好。色調は外面が褐色で、内面は暗灰色を呈する。

瓦質土器（第25図15）

口縁部以下は欠損。内傾しながら直線的に立上がり、口唇部に向うに

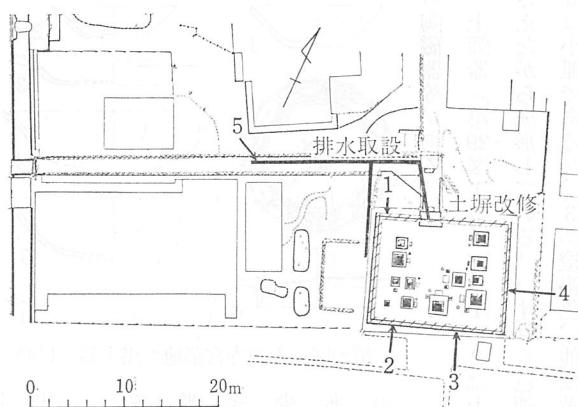
従つて厚くなる。胎土は粗く、焼成も悪い。色調は灰色を呈する。おそらく元興寺出土蔵骨器の形式の火消壺形蔵骨器と考えられる。

人骨

三センチ程の大きさの破片で、頭骨と考えられる。火をうけていたた

め、内面は黒く変色している。

註



第27図 大聖寺宮墓地調査箇所の位置 (1/800)

六年度大聖寺宮墓地土壙改修排水管埋設工事箇所の調査を実施するに際して、昭和五十六年九月二十三日から十月十四日まで立会調査を行った。掘削溝のうち五箇所については土層の実測図を作成した(第27・28図)。

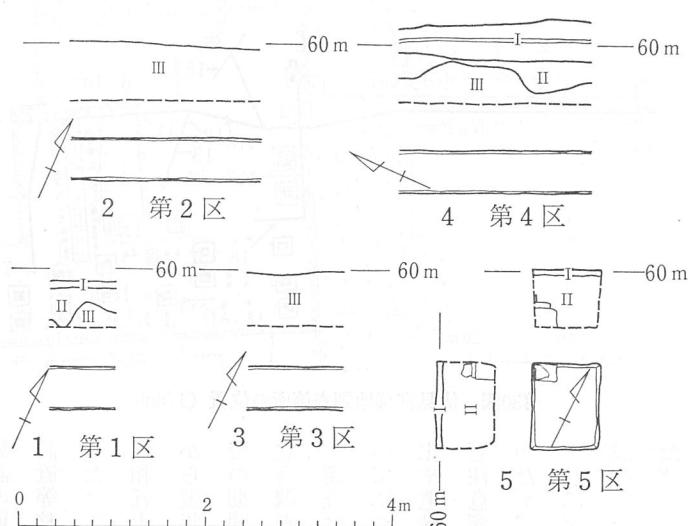
掘削はおおむね幅○・四○・五メートル、深さ○・六メートルである

が、第5実測区は排水溝の集水枠にあたるため、幅がやや広い。

標準的な層序は次の通りである。

I層 表土で、黒色ないし黄色を呈し、砂利や礫を含む。
II層 磚を含む黒褐色土層で、締まりは悪い。
III層 茶褐色土層で、II層同様磚を含むが、よく締まっている。

以上の各層は墓地の整地作業等に伴って形成されたものであろう。ところで、第5実測区の西北隅角部において、風化磚に取り囲まれた三段積の花崗岩切石が検出された。何らかの遺構の一部と思われるが、これ以上の掘削を控え、切石等をそのまま保存することとした。なお、



第28図 大聖寺宮墓地実測区平面および断面 (1/80)

切石及びその周囲から遺物は全く出土していない。

出土した遺物は総数六〇点で、

各層から出土している。土師器が

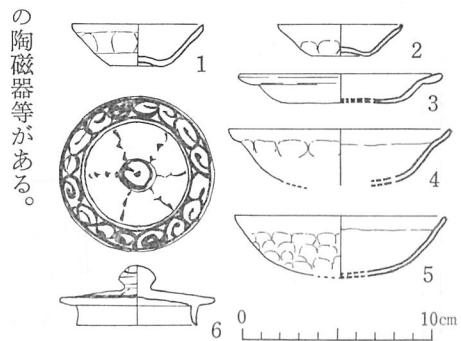
半数の三〇点を占めるが、接合で

きるものが多く、個体数としては

少ない。つぎに須恵器の一〇点が

あるが、小片ばかりで図示する程

のものはない。この他には少量



第29図 大聖寺宮墓地の出土品 (1/4)

昭和五十六年度伏見宮墓地土塹改修・水道管及び排水管埋設工事 箇所の調査

伏見宮墓地の土塹が老朽化したので新たにブロック塹に改修すること

になり、あわせて水道

施設の取設、排水溝の

設置等整備工事を実施

した。工事に際しては

昭和五十六年九月一日

から翌年三月十九日ま

での期間中の掘削時に

立会調査を行った。

調査は、掘削溝のす

べてについて土層の変

化や遺構遺物の存否な

ど注意深く観察して行

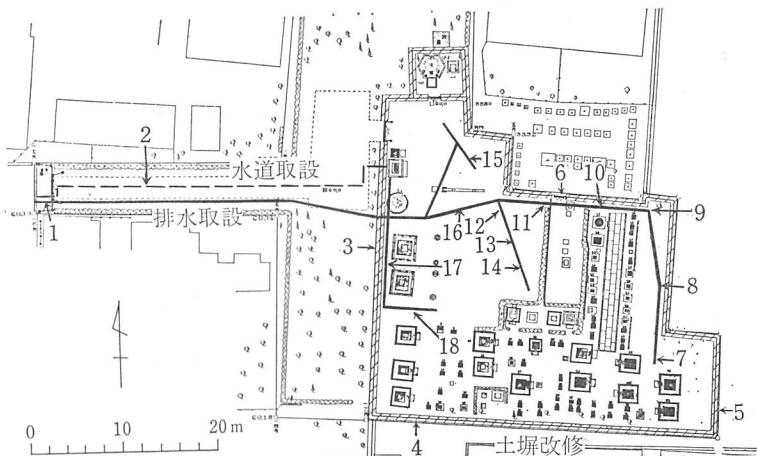
つたが、第30図に示す

ようすに随所に実測区を

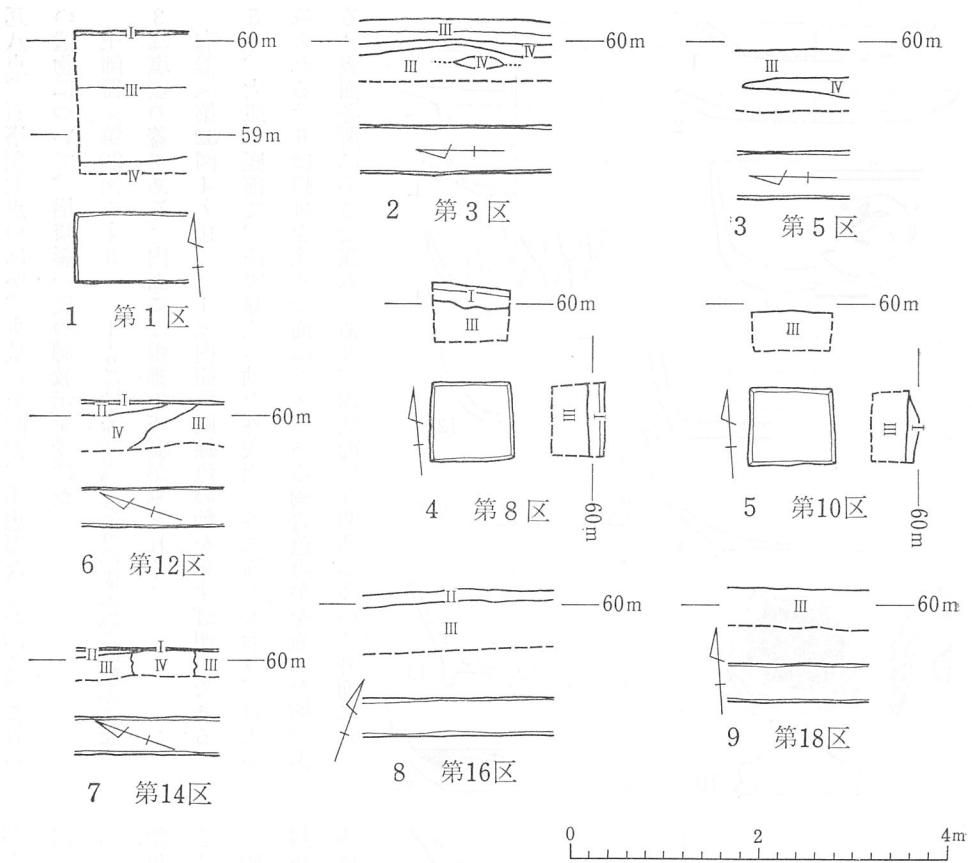
設けて土層図を作成し

た。

(藤井良章・棕本 武・土生田純之)



第30図 伏見宮墓地調査箇所の位置 (1/800)



第31図 伏見宮墓地実測区平面および断面 (1/80)

掘削は、土壌改修部が幅○・五メートル、深さ○・六メートル、他は幅○・四メートル、深さ○・五メートルであるが、部分的に幅、深さの双方とも拡大した所がある。掘削溝壁面に認められる土相は、次の種類に分けることが可能である。

I 表土で、黒色ないし茶褐色を呈し、一部に小礫を含む。

II 白砂を含む砂質土で、かつての表土と思われる。

III 整地層で、礫や瓦を含む。当墓地では最も普遍的に認められる。

IV 直径一〇～一〇センチの粗大礫と小円礫からなる。

各実測区の壁面はIIIを基調として共通しており、過去に当墓地全域が整地されたことを示している。またIIIの中には、IIやIVの介在する部分のほか、攪乱された所も多く認められるので、整地作業が一度だけではなかつたことがわかる。IVのうち第1区(正門部)のものは、基礎としておかれたものであろう。他の部分では瓦片なども混在しているので、IIIと同様、整地作業時に形成されたものと思われる。

以上のように遺構は検出されなかつたので、予定通り施工した。

出土した遺物は総計六一点で、陶器二七点、磁器一一点、

瓦八点、石塔類七点のほか、少量の土師器、須恵器などがある。これらの遺物について、檜崎彰一氏の御教示を受けた。

土師器（第32図1～3） 1・2は小皿で、ともに横撫で調整を施す。

3は塩壺の蓋である。内面には纖維の圧痕がみられる。

陶器（第32図4～10） 4は内面に灰緑色の釉を施す灯明皿である。

5は、大皿の底部で、淡灰緑色の釉を外底面以外に施しており、貫入がみられる。6は疊付を除く全面に貫入のある濁青色の釉を施した椀である。表面各所に小さな窪みがあり、内底面には凹凸が多い。外面には、

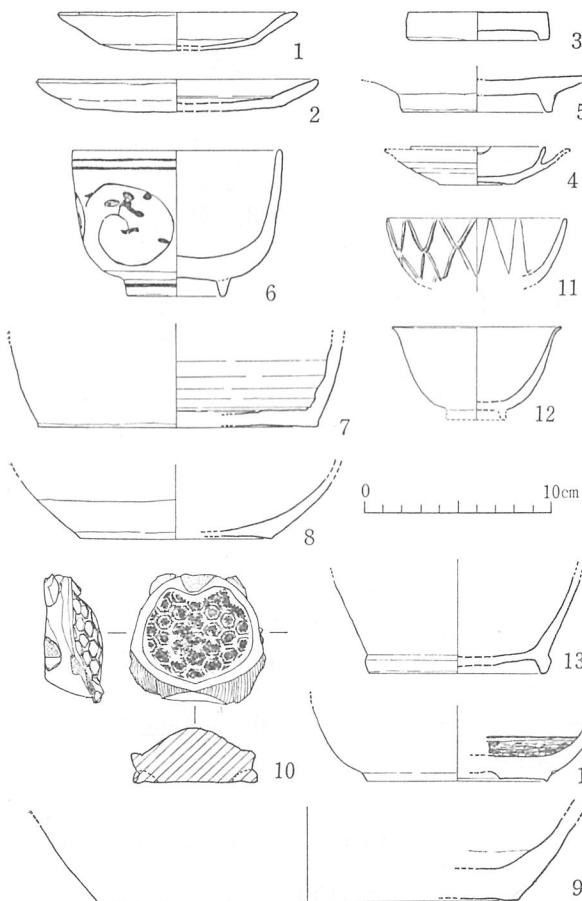
蔓と草を表現した絵文様を六回繰り返して一周させた下絵付がみられる（図版八）。7は鉄釉壺の、8は灰釉壺の底部で、いずれも唐津焼である。9は信楽焼の飯胴甕である。胎土に大量の白色砂粒を含む。内外赤紫色を呈し、調整は横撫でによる。10は備前の型物で、亀形の文鎮である。脚は別造りで、貼り付けている（図版八）。

磁器（第32図11～14） 11は内外面に文様のある染付の椀。12は淡灰色の釉を施した椀で、貫入がみられる。13は白磁壺の底部、14は見込み模様のある染付の鉢である。11・13・14は伊万里産と思われる。

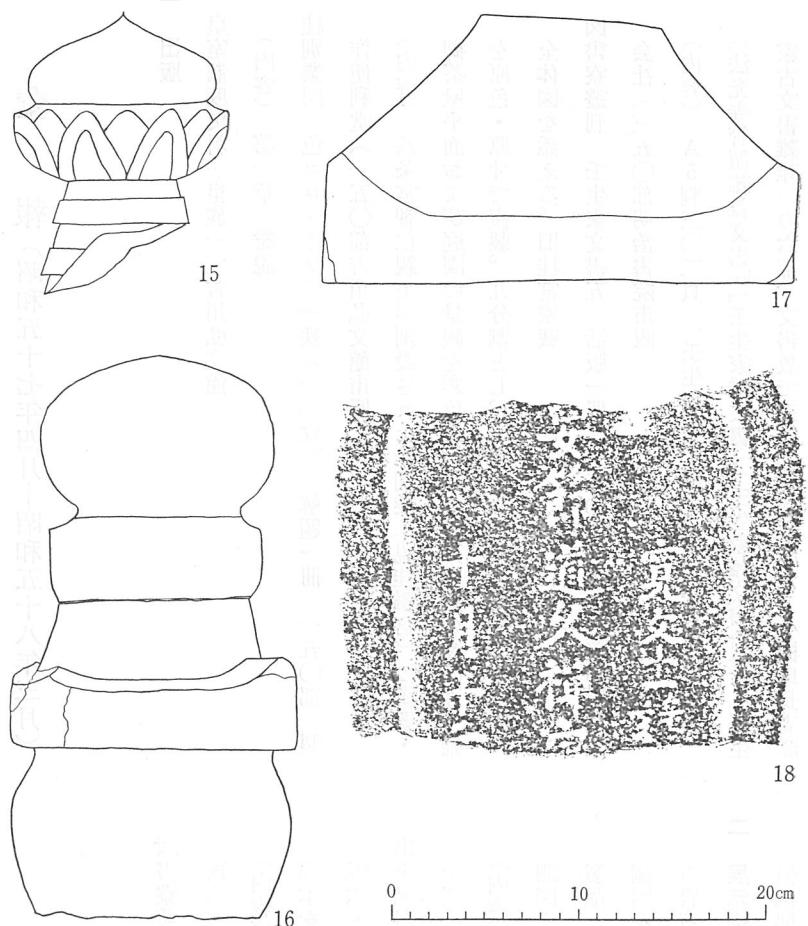
石塔類（第33図15～18） 15は宝篋印塔の相輪で、宝

珠・受花と九輪の上部にあたる。16は一石五輪塔で、地輪のみを欠く。17は五輪塔の火輪である。底面の反りはほとんど認められない。18は上部、下部が折損した舟形石塔である。前面に刻字があり、「寛文十一辛亥」「晏節道久禪定」「十月十二」と読める。以上の材質は、16が砂岩、他は花崗岩である。

（藤井良章・椋本 武・土生田純之）



第32図 伏見宮墓地の出土品(1) (1/4)



第33図 伏見宮墓地の出土品(2) (1/4)



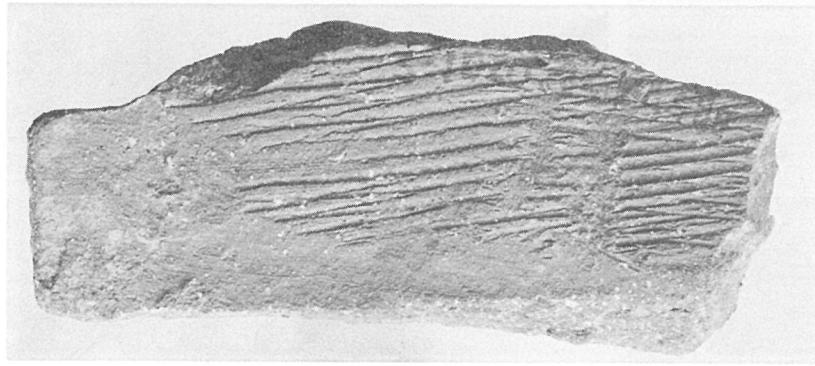
1



2



3

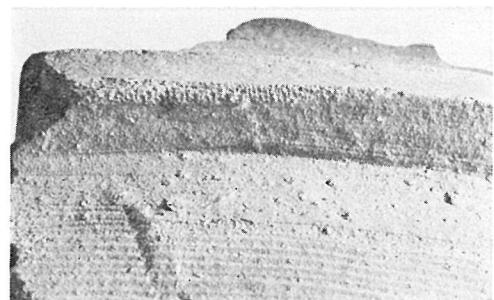


4

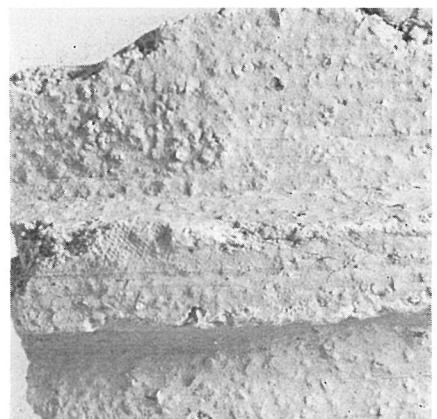
恵我藻伏岡陵出土の埴輪細部（I）（ $\times 1.2$ ）（1～3 極細横刷毛目，4 叩きの可能性のある埴輪内面）



5 粘土紐の接合部分（内面）

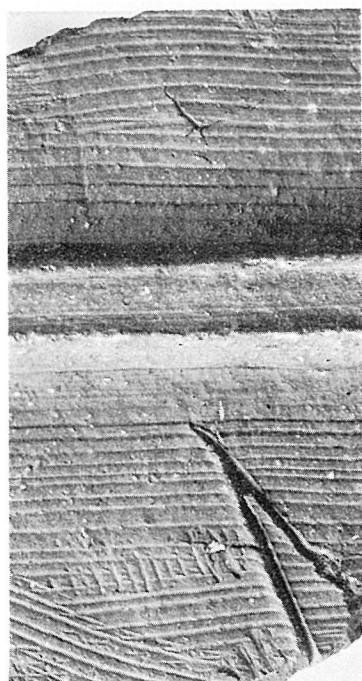


6

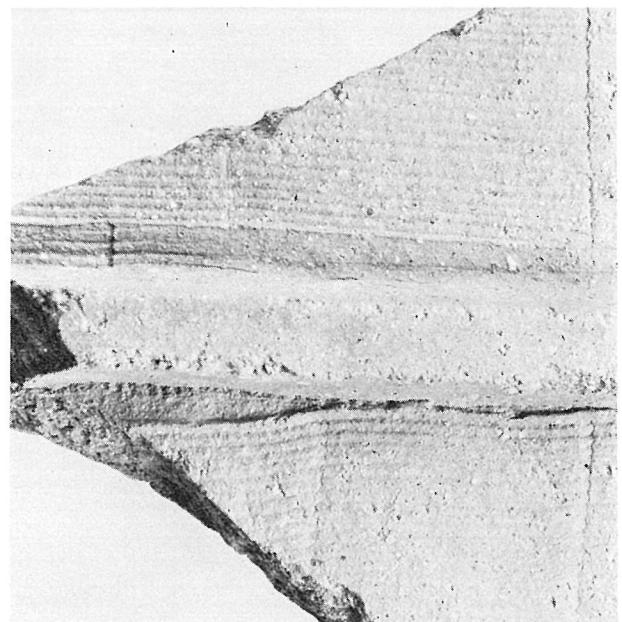


7

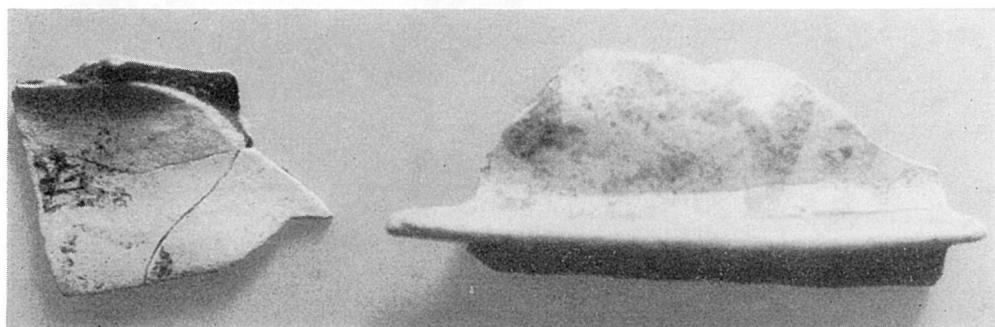
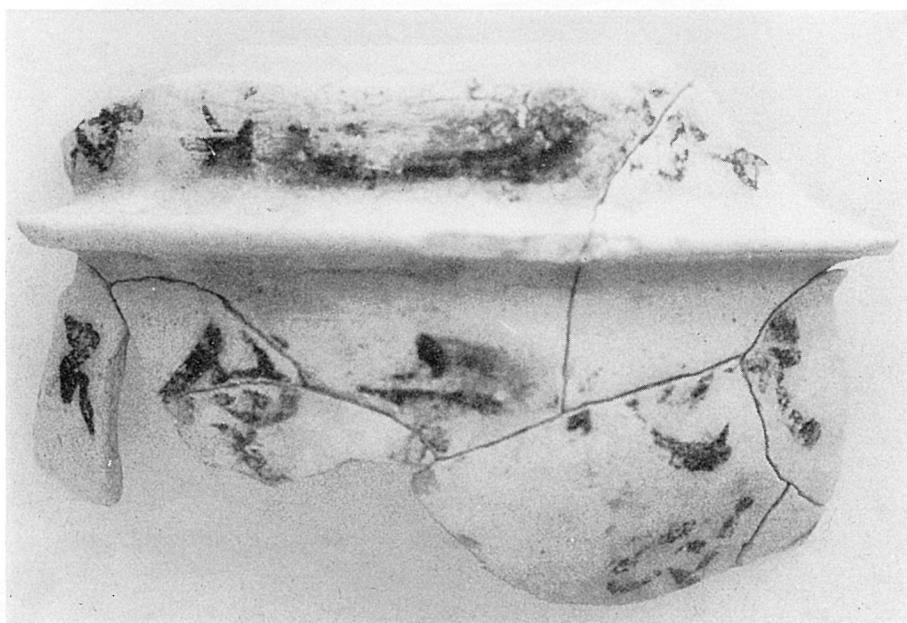
6・7 布目圧痕の認められる埴輪



9 横刷毛目→横撫で

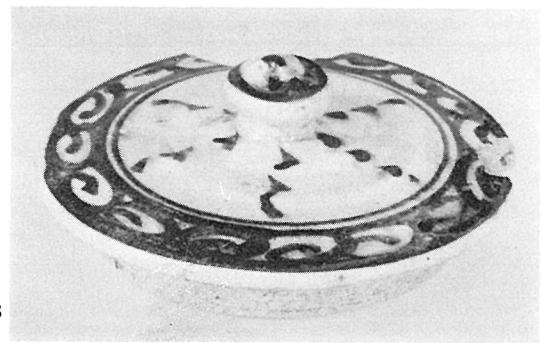


8 縦刷毛目→横刷毛目→横撫で→横刷毛目
恵我藻伏岡陵出土の埴輪細部（II）



4

佐保山東陵の出土品



1・2 伏見宮墓地の出土品 3 大聖寺宮墓地の出土品